拾遺都名所圖会　二之上

ル 4
5325
2

門ル 4
5325
2

拾遺都名所圖會巻之二目録

左青龍首

祇園削掛詣　同神事　千文毬　神輿洗
祇園香煎　二軒茶屋 合餅 渡水 阿蘭陀 休息　知恩院 補遺　太子水
螢嵋　直葛原 長楽寺碑銘　歌仙堂 名大雅堂 墓碑　芭蕉堂 南無庵 芭蕉翁碑
泰山府君　捨山王　疫伏社　蓮華院舊蹟
祇園女御　鷲尾　雲居寺旧跡　高臺寺 補遺 天満宮 [illegible]
崇徳馬場 宮辻　桂橋寺　霊山寺　舉白堂旧蹟
山之井　藻虫菴旧趾　鼠堂屋敷　經書堂
嫗堂　大日堂　仲光院　寶德寺
地藏院　清水隨求堂　尾振谷　南藏院
九重丹楓　秋葉社 獅子口 要石 覺明水　六條院陵　延年寺辻子
躬親廟塔　通妙寺 妙見社　良經公碑　法國寺

分類番号 J3 95(5)
通番

<49-1953>

袋中菴
阿佛家
城東寺
専定寺
泉涌寺 塔頭
落穂
万壽寺
海蔵院
法性寺旧蹟 同観音
晴明墓
極楽寺
勧修寺 彦中 十五騎
大石屋舗

赤築地
西福寺
平教盛家
智積院
雲龍院 来迎院
善能寺 戒光寺
瀧尾祠
俊成卿墓
月輪
羅刹谷
獨鈷水
稲荷山初午詣
山階八幡宮
田村将軍墳

安祥院
焔魔堂
上行寺
新日吉社
安楽光院 観音寺
新善光寺 悲田院
五葉辻
自然居士墳
光明峯 光明峯寺跡
薬師堂
毘沙門堂
小栗栖法華檀林
三條右大臣墳
野色山

西光寺
六道迎鐘
窄岸
剱宮
常盤前宅地
三聖寺
西寺古蹟
地蔵堂
遣迎院
田中社
明智光秀亡蹟
西之山巌屋社
小野随心院

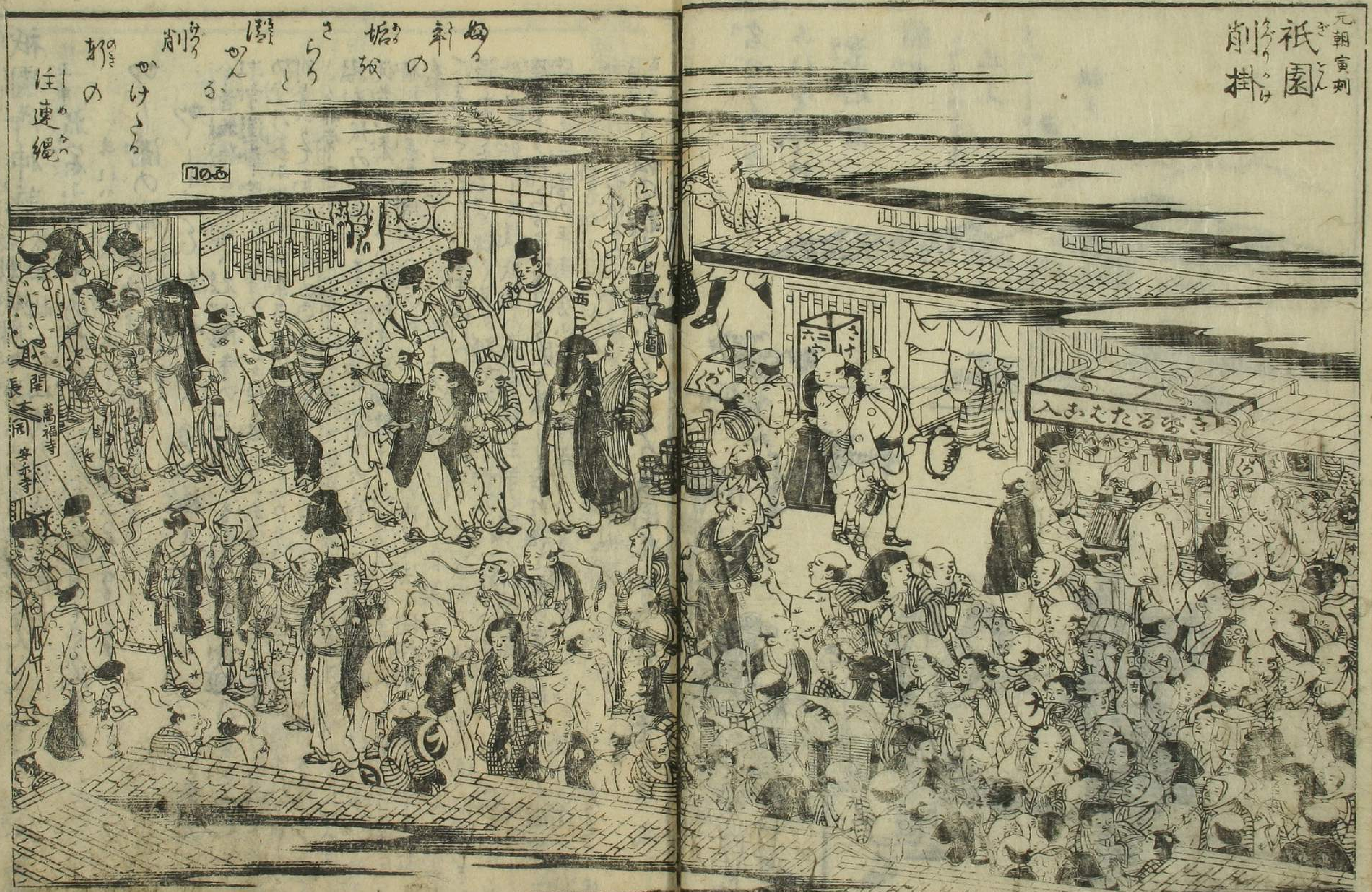
萱尾社
北小栗栖天神
牛尾古寺山
白石明神社
白河寺
梅本寺
東山寺
四宮河原
業平谷
阿弥陀堂

腹帯地蔵
大宅山巌屋社 大宅寺
布引瀧
白石菴
三宮社
花山阿弥陀堂
神無森
諸羽山
奴茶屋

内裏芝
興福寺古跡
蛇ケ渕 横金屑并藍鮒
蓮如上人墳
花山稲荷祠
元慶寺
鵜坂
十禅寺
地蔵寺

外山
妙見社
法厳寺
實如上人墳
大石断食石
僧正遍昭墳
蝉丸塔
人康親王旧趾
護國寺

名どころを
それを都の
案内者
圖會
ちらしも
みよ
うつし画
湘夕


元朝寅刻
祇園削掛
ぬる年の垢抜さらりと清めんる削かけゝる軒の注連縄
西の門
長本阁
萬福寺
安养寺

祇園御神詠
洛東祇園午頭天王の御神詠とてあんじ此御歌より近年欝欝梅を奉献して社頭に植給事多し

玉葉
祇宿に手をやその梅花さかへうへ主人の君もさかへなん
これハ祇園乃御前なりし人の夢に見へたるとぞ

めでし満の梅
当社神楽所のあたりにある紅梅の名なり

めでし梅ぞ毎木もにほへ梅乃花　宗祇

今昔物語云祇園ハ元山階寺の末寺なりけるを祇園乃東に比叡山乃末寺蓮華院といふ寺ありけるは祇園の別当良算といふ者ありその蓮華院の堂乃まへに微妙紅葉乃ありけるを折にやりけるを蓮華院の僧これを制して曰別当ハたとへ天台末寺の内なる木をさへ取るは世に案内もなくして折ぞかし非常のなりと良算が使を返して折らせざりけれバ良算大に嗔りて何くいへる其本ハみな伐て来よと従者を遣りけるに従者坂根際より伐て取りけり良算しよく嗔りける従者の来ぬさきに其紅葉坂根際より伐てけり横川の慈恵僧正天台の座主として殿下の御修法に法性寺に籠りておはしましけるに禁しくせよと申されしハ座主大に嗔らせ給ひて良算を召すといへども良算放言して参らざりけれハ座主山門の所司を呼下して祇園乃神人等一統に延暦寺に随ふべき寄文を儲て其に判を加へよと責られしハ神人等責られて従て判を加へたり斯して後祇園ハ天台山の末寺と成ぬ別当良算を追放すべきよし座主より仰られけれバ良算へられしを本しせん権を儲け軍を調へて待ける間座主弥嗔りて西塔の平南房に住ける暦荷といふ武術すぐれし者身一の人に致頼が入禅都へ入名高き者を二人と祇園に差して良算を追しけり其後よりハ暦荷を別当にして執行せしめけるとぞ

祇園社百首
あふ坂の杉より杉にかすみけり祇園精舎の春乃曙　信成

栗太郡　勢田川より東をいふ
昔此地に栗の大木ありて郡名とした
今昔物語云むかし近江国栗太郡に大なる栢の木ありけり圍五百尋なりけり其木の高さ枝のさしひろごる事を思ひやるべし其影朝ハ丹波の国に差し夕ハ伊勢国を蔭ふ霹靂大風にも不動ずる間其国の志賀栗太甲賀三郡の百姓此木の蔭多くて耕作をえせざりけれハ此由を天皇に奏しけれバ則掃守の宿祢某が仕を遣ハし此木を伐倒したり其後地を耕しける其所の百姓の子孫今に其郡にありとぞ云
○按るに此物がたりハ栢の木とありされども大木其地にありて郡名に号る事その例和漢ともに多し栗の実の多く栢の葉もまがふべくへうにハ栗とも又栢とも書べし今にも其実の落たる所のある里人これをスクモといふ

栗太里　夫木集
よそにても名にハ高しとつげよ家に栗もとの里

龍神祠○俵藤太祠　橋の右に并ぶ鎮社ならびあり秀郷子孫松の辺を通るに郡下馬して拝して通らざれハ必祟ありといふ○これハ世の俗人されども小祠拾るも今に公より修補し給ふ是橋姫明神の祠なり橋守の神とも云ふ古記の経説をぞ祭るとすのみなりと橋守護の神之山城宇治橋伴勢宇治橋淀の橋にも橋姫の祠あり紙し蒲生氏の祖ともあれバ昔より其氏の神を祀り来るとも云へり

勢田駅　古神宮勅使進発に會坂の関を出て近江に至り勢田駅に到る
司差供給次到野洲河ととを云　江次第

建部明神社　近江国一ノ宮也
所祭大己貴命天武帝白鳳に年の勧請也
葦原一宮の中の其一也と云　神社啓蒙
武部大社一宮大神天国一命之云

平治物語頼朝遠流の条下曰盛安も
大津までまかりたりし人々ハとゞまりぬる上
せられハ惜もなくて兵にてひとりの地へ
送り給ハゞ行ぬらくて参送り
奉る所に社の見えたるハ何なる社
ぞと問へバ八まんの明神なりと佐殿
にハ今夜ハ社前に通夜して
まゐらせ給ひなバよしと申ければ
切給の祈りをも申さんとてさま
まゐらせけるに夜ふけて人々
まどろみて盛安がみるハ佐殿を
御むかへにまゐるべからずとて
ぜんハ不思議の霊夢を蒙りてまう
くる也後に君に申せしに
八幡宮にまゐりて大床に座を
盛安ぞ供して石清水の上に
伺公せられて十二三計の童
子が弓箭をいだして大床に

ミ世話の武勇ぶり
やさしく候て参り
たんとやさきれ
えが御宝殿の
内よりけだかき
御声にて深く
かきあざけ給はれ
頼朝にあたへんとるぞ
先頼朝に食せよと給
られバ天子に抱給ひて御
前に置て何事かんと見
ますれバあらひしと物にて果
それより後ハら盛安へて
清治せしつバ六十六ケ国の
その本領の地頭で
押ぶさりて三ケ国を三ケ国に
いりてかまくらの盛安に頼
世話ひしを懐中にして
なりけり

野路玉川

あすもこん野路の玉川萩こえて色なる波に月やどりけり

俊頼

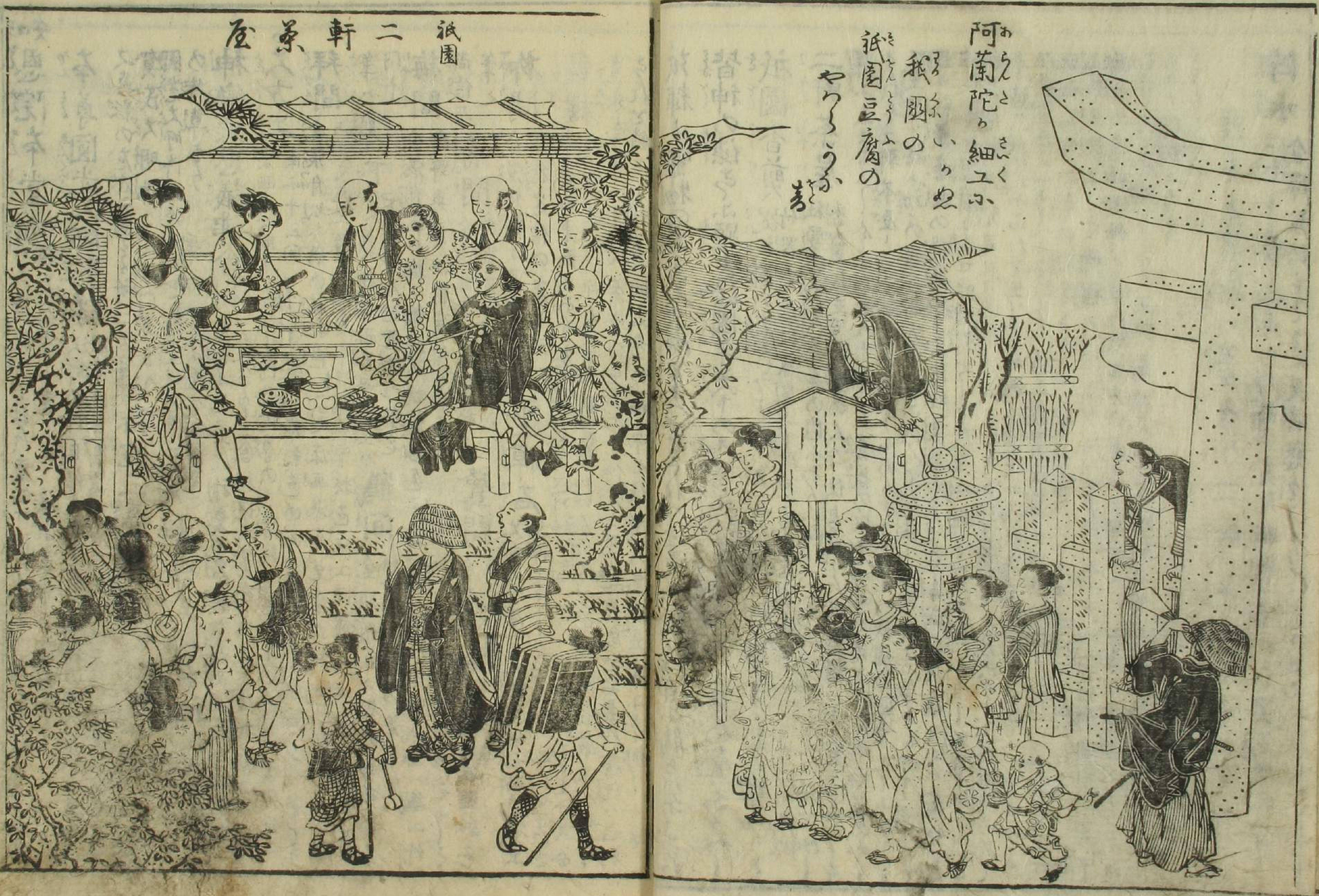
光輝し雛物のおもみに附そうとされバ洛東の賑ひ此日に勝るべしとされ皆神の徳ありて顕ま治國平天下の御時に値て萬歳を謳ふ慶の聲あるべし

祇園香煎　洛祇園の名産にて世に名高し西門の街に製する家四五軒ありて竹器に入これを售ぐ又下河原の茶店にも香煎を立てつ○ふに出る

二軒茶屋　社頭の南大鳥居の内にあり此二軒の茶店は鎌子とて香煎を立て社参の人の休息所とす其濫觴は年暦久遠にして詳ならず今より百八十年前慶長の頃東方にも建て東西両翼のごとしこれを二軒茶屋といふむかしの例今にありて元朝には祇園の社中にて来迎する王服を縫ひ初め鎌子西方の家に傳へて秘蔵す次てこれを古代の紀にて膳に紅葉唐松の模様ある名を紅葉釜といふ毎歳六月朔日には氷餅を進じ物すらん六日串にさして豆腐に合せ味噌引どころ豆合餅といふ又六月六日にも神楽所にて祭儀の役人にこれを出してもてなし又足が浅社にて洗園子の額とし此一茶店今はいづくへにも渡りてつ○ふ菽腐を剪りて田楽の形とし串に挿て酒飯を售る所の風俗なりとて魚肉を禁ず又禁じられしを山門の末院にして佛龍のかよりゆへなり今も山門の阿闍梨一夏中籠居て洛の社社巡拝し其時西方の茶店に憩ひたまひ日毎に齋食ありしもむかしの遺風なりとぞ又阿蘭陀人洛東通行の時東方の茶店にやすらひ給ふも流例になりしとぞかし

月をまて花は青ありし二軒茶屋　季吟

浮水　二軒茶屋の名産也大機の実を梅酢に漬るとぞ足酒毒をけし食滞を治すとて東客懇望すとぞこれを進む


祇園 二軒茶屋
阿蘭陀の細工ハ
るりいりぬ
祇園の
祇園豆腐の
やうらうか
青

知恩院本堂 昔ハ大師影堂と称す東西廿二間又ハ南北十七間三尺又寸見皆南面 勅額大谷寺と書して後奈良帝の宸翰なり

本尊圓光大師影像 根本御自作同四十八日御開帳供養の霊像なるの文に大師の御自作なり居数に御補の時の記あり其中に

又真影の左右に圖する所二天童子 弥陀三尊 上足寛印供奉の作にして東檀中央に安す恵心僧都乃

賀茂大明神 毘沙門天なり

圓光大師御晩年の持尊なり 釈迦像 堂後に図する所 法橋法眼の筆之 善導大師像 長三尺弐寸 是則自作の像之

神變不思議佛舎利 是へらして堂内に安置す 舎利塔ハ黄金にして唐物なり 神変の名義ハ義山上人舎利の記に

○大方丈 東西十七間半 南北十三間 佛間 阿弥陀尊の像 安阿弥快慶の作之 蓮花極彩色の画ハ狩野主馬尚信乃筆なり

拝間 金張付松に鶴の極彩色 上段 床画瀑布見李太白 中段 張付画ハ鉄拐 そして画工前に同し 中松色画工同前 筆ハ前に 下段 画ハ劉女西王母 畫工ハ狩野外記信政乃筆之 鶴間 金張付松に鶴乃画極彩色 狩野尚信の筆なり

梅間 金張付画ハ梅に雉松に鳩極彩色画工ハ狩野奥意法橋定信筆なり 裏上段 金張付画ハ梅に竹 音呼極彩色にして

菊間 金張付菊の画極彩色 狩野政信の筆なり 鷺間 画工は前 金張付柳に鷺の画極彩色

柳間 金張付柳に燕の極彩色 法橋定信の筆之 坐禅石 大方丈の庭にあり昔慈鎮和尚此石上に坐禅しのまふとそ 此石初ハ山門の下にありを

○鐘樓 本堂の東南にあり方四間尾昔 洪鐘 高一丈八寸 径九尺 厚九寸五分 延宝六年十二月十五日供養あり 銘六字名號霊巌上人の筆

寛永年中 輪藏 本堂の東にあり 傳大士普建普成を安置す 蔵経ハ福州 開元寺の蔵本之 此所へ元和五年に草創し これを鋳る

○鎮守八幡宮 相殿ハ天照太神 春日山王熊野を合す 義蓍僧正の勧請之 又愛宕氣比 祀る霊誉上人の勧請にて都て七社之宮守の居所を真葛庵とす

○山門 元和五年の御造建なり 寺號に曰三解脱門に準して三門と書る 門ハ空無相無作門とて門上に安する所ハ宝冠釈迦佛 長五丈 脇士ハ善財童子須達長者 及び十六羅漢なり

○下乗 射内にあり退凡の石駒 藤木甲斐の守之徒然草に曰退凡下乗乃卒都婆外にありて下

○櫻馬場 山門通をいふ 舊ハ祇園の林領之 延宝七年代地ありて新しく所之 路傍の櫻ハ江別勝所の城主松平多康将これを寄附しのまふ

○鉄盤石 山門の下にあり 仍て三條に治宗近鉄盤にありといふ 是を此石いふ へハ子院霊雲院の外林中にあり此所に及の水あるによりて貞享元年十月此所にうつし の前編に記へり

○阿弥陀堂 山門の上にあり 舊ハ東の方上勢至堂の前にあり 宝永七年此地に移を 本尊阿弥陀佛坐像にして春日佛師替文會稽主勲の作之 いふへハ大和國百濟寺と号す本尊ハ正徳二年義山上人作来してこの堂に 初め安する所ハ立像五尺運慶の作なり今本堂殿壇にあり又堂内に伽藍神 の四天王及安置し多門持國増長廣目之是又義山上人享保三年に寄せる所 なり天蓋の蟠龍の画ハ海北友竹齋の筆なり

○古墳 阿弥陀堂の北にあり五輪の石塔 姿高廿九尺五寸 地輪方三尺五寸 これ 何人の為に建るといふ事を知られ 拾遺楽記に曰上東門院 藤原彰子 の 葬ハとかれを此陵にうつんなど 又一説に曰足今の大谷石子堂の岡山相列 鎮 創極楽寺忍證の墓之 是ハ石子堂尊上人にあり 遊世までかの墓所にそ た子 堂より衆僧来ツて法會供養をなしもそ 今ハ絶ぬ 無銘のゆへに或説とうんく後考あるへし

本堂廻櫻樹 淀の城主永井信濃守尚政これを植らる 影向石 法然上人御晩年の時加茂太神此石上に降臨します

○元祖御廟 東の山上にあり賜蓮堂とよぶ此名義は法然上人の傳記に曰
其夢に上人の廟堂に参られし眞年二月十四日の夜一人の女房夢に一人の老僧
ありていはく廟にけざる蓮華一茎枝あらずして此地に詣せんその時の此花を
とへるにしらす極楽往生の粉に入るときさえるしまり此事普く人に示さんとし
宮の人婦人掌を合て足を交ゆると見て夢覚ぬ此所に詣るに驗ありとそかの墳
墓に至りしに夢に見し地景に露たがはざりけれは信心懺りて
てそのちは世に伝へられ祥忌を迎て歩を運ふ貴賤市をなし紬を奉りて佛恩
を謝するを知る故に知恩院といふあり是よりそれより年々御忌を迎て法会を執
行したまふ後柏原帝勅語を賜って法則を定め宜法然上人の御忌と修せらるべしとぞ今
に至って天樂と爲て且式永く違ふる事なし笏拍子にて行導念佛あるも亦此所謂あり

○太子堂舊跡 五條下寺町にあり此地は光玄院の地也 往古太子校は所の後に
太子水 知恩院門跡殿舎の前にあり

○本願寺舊趾 知恩院山門の小松馬場の地也親鸞聖人御廟の跡也塔中西念院にあり宗旨持佛あり二條に鍛冶
年聖人の息女覚信尼の建立之寺也其後覚如の息覺恵法師それより代々を
経て文明二年二月十六日山徒の爲に破却せられしとそ

○螢嶋 計にあり 東の山上五町

東山知恩院ともいひけるそ

かきやりし昔古を庭のほとりにて 東山の

梅波居

真葛原 知恩院山門の前より南圓山安養寺のかたをいふ 祇園林まてをいふなるらん

祇園ハ松としくれのそらもそはくれ京に風さはくなり 慈鎮

此歌ハ慈鎮和尚坐禅石のうへに坐して詠給ふとなん新古今集にを大僧正慈圓と
記ゆるこれハ元の時のそろハ季吟翁八代集の抄に曰慈圓の歌と
面とし松として祇園のひろきをいふとそ詠る人祇園ハとこ詞ハ中ひ出て松と
しくれの際かめるか如くなりとて五文字に真葛原とおもひけそもつきなく
かさね詞の詞とは入心之真葛ハそれ多く一筋すぬるにそさらくといふ
字力あるに根ろそろのほよく切するといへるなるへしとそ

後拾遺 かきしてそ石の葉もうちそはくとすの松根の其人の杜風 西園寺

新拾遺 今そしるはくそと京に吹風のうらみも玄にうくる物とは 道智法師

新後拾遺 はくは京衆のふきけさてすれ根し中を杜風そぬく 従二位忠兼

右の物に名所にもあらとわかれとも化野千代古道のたくひ世のあるある
にハ化野をよむ君か代の久しきを祇千代古道にハあかるときか光眼るさるさハ
くと真葛原はくとそらくとはしけるそ後世名所にもよみされで今へそうし
ことに離し此ありの名とハすらるし

東山安養寺詠眺望 一とはつ夕日にはてかふちうれ山よりあまりそちの川なみ 頓阿

長樂寺碑銘
東山勝景。大悲霊境。遠臨神洲。邇𫉬鷲嶺。花穠雪香
竹苞月冷。片石維貞。勒銘傳永。
平信好撰
大江資衡書

歌仙堂 又の名ハ大雅堂といふ雙林寺境内門前の小高き所にあり（別室ニ観世音を安置ス金銅佛長ハ五寸五分許）此堂の名を歌仙堂といふハちかきころ池野秋平といふ風流の人ありかれかうへ冷泉家乃門に入て書画を善くす名ハ無名字ハ貸成とつうして大雅堂といふ今ハなくなりてを

あまつさへ世のむかしに没せられしか其門葉其趾を空しくせんことをおしみて古へ霊山にて大哉翁長嘯子のすみかなりし歌仙堂の古き礎をもとめてかの山の坊よりもらひうけしを基として此に建て楼の上に六畳下に六畳の庭数て歌仙堂の舊蹟をとむ前の庭にハかの大雅堂といふ篆印を庭に造りて置からの足あと中尾氏といふ人其材石の用を捨て建らまてしかも貸成が洛の西陣といふ所の寺にて有けるが中頃二條の南なる樋口の町にとみ聖護院乃邑にうつりまた知恩院の西なる袋町に廬をむすび遂に祇園の南なる葛原居に終をとる宿坊の淨光寺に葬る其墓碑ハ大典禅師の書なりとそこに載せを

故東山畫隠大雅池君墓誌 篆額ハ芙蓉房の書なり

池貸成歿矣。既表墓焉而未有銘也。以爲請。余嘗觀貸成爲人蕭散。不以寵辱驚志。善與物和而不苟合。紆志外跡。放而内實修撿。與人交謙損而不阿。簡於禮法。當往不往。當荅不荅。而頗諸義未嘗有所失。恵而弗望。廉而弗劌。其於取予得失。恬淡如也。平生行事。多出於人之所不意。於是有晒人之目焉。貸成生平安。幼而穎異。學文學書無不能。而獨長於繪事。圖山水尤妙。好遊名岳。尤趨健髙峻幽奥。無不屆極。即取以爲毫端趣。數登富士而毎異其路。因作富士圖一百。各變狀態。皆其所經覽。古今画工所未及也。安永丙申四月十三日。病卒于葛原艸堂。距生享保癸卯五月四日。得季五十有四。葬于舟岡之南淨光寺。先塋之側。貸成名無名。始名勤。遠近皆以大雅堂稱之。妻玉瀾。姓德山。間靖不飾。能配夫之行。亦能畫有名。無子。家絶。悲夫。世皆知大雅之畫。而不知其行。知其行而不知其心。故爲叙其大略。如其世則存焉。不待論也。銘曰

若人胡不壽。若人胡無嗣。廢安子共。淨光之地

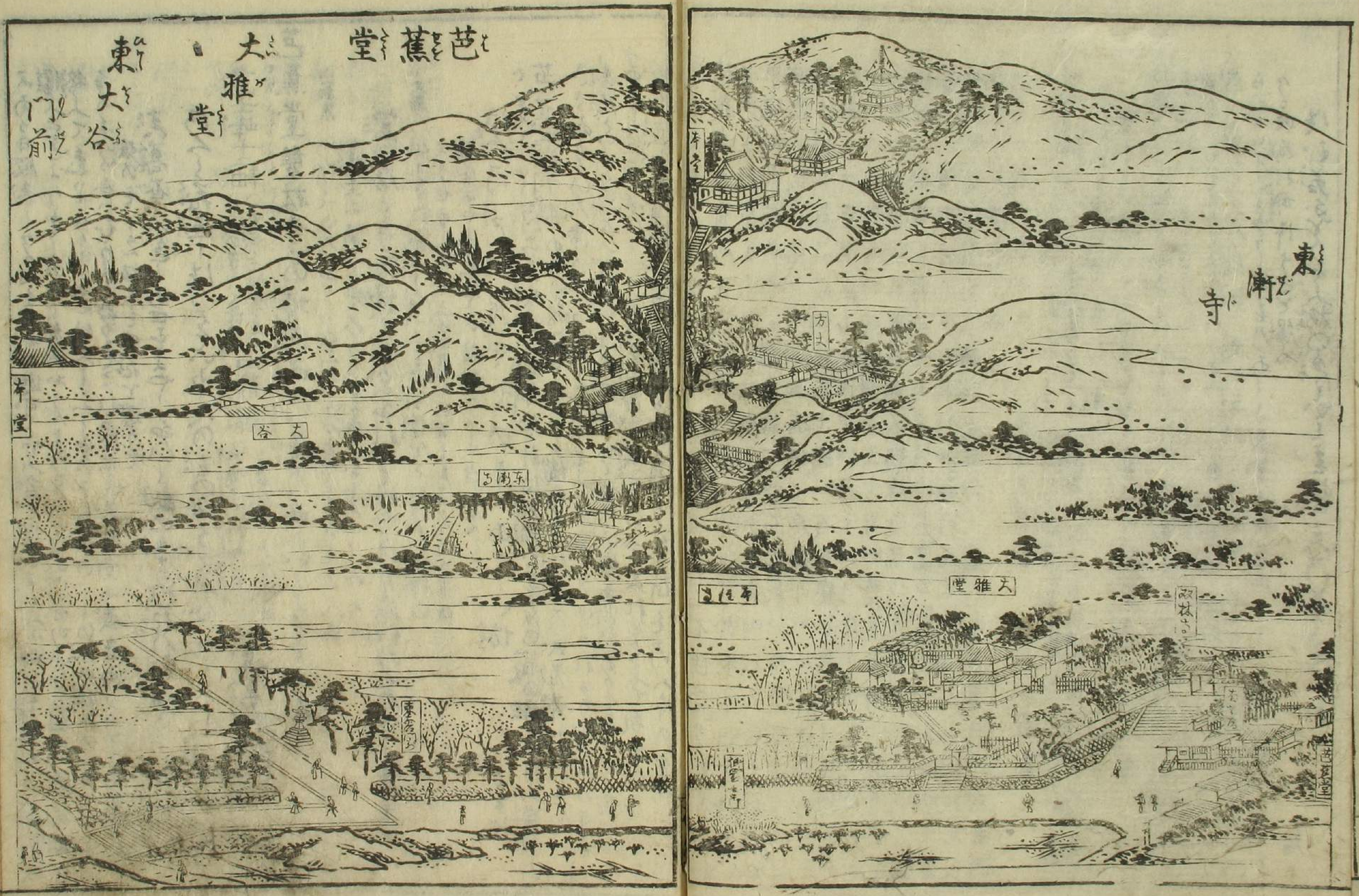
安永六季丁酉六月　淡海竺常撰　韓天壽書

まてに今よろいさしの老杖のむかし享保の頃下河原に茶店をかまへし女あり名を梶といふ容顔おのづからの艶麗ありてつねに粧粉をかざらざれどゆきかふの人ハ目を遊ばしむるなかりけれ歌をよむ梶の葉といふ集あり

雪ふれハ袖にとめてはらはん狭の哀れの書にしるく　梶

此梶乃孫を嗣て又百合といふ女あり夫と共に東武より来て漂流して眞葛原に茶店をいとなみけりかひもせり此女も和歌を好み又百合草といふ集あり百合のむすめを名ふまちといふありて大雅堂貸成か妻となり書ハ大和の柳里恭に学んで其乃風流に随ひ玉瀾といふ其夫婦共に繪事の家の門にらぬかりしあるかなしの其乃おしき若菜に摘そへて携へ敷きしをしもてかく何為村卿作らるを得たる

はむ若菜をつみそへ梅の色香をもまれて乃花をみせかな


東漸寺
芭蕉堂
大雅堂
東大谷門前
方丈
大雅堂
大谷
本堂
本堂

又ある日殿継しける御まち女に遊可といふ名を撰て其うへに白き手巾に赤き紐にて蔽膝成
綴せよとのかしこき仰のかしこさにかしこまりて手巾をかしらに頂き蔽膝を腰に
結ふて給ひけるとなん此人もこの世の花盛のこゝしの床の机下の八日にえらまく
なりにけるを今はむかしとなりてこれらの品も大雅堂に蔵めありけるとなん

真葛葉のいとしげき世をよそに見し秋のあはれを花の寝ぬさ　百合

ゆかしき花盛にはなちそいにしへのその名をかたるに白かるし　玉瀾　遊可

盡士峰十二軸　貸成の筆にて各時　石類器　長嘯子の持物霊山にあり　真葛草　初めは真葛が原の葛畳　しと哥仙堂と共に寺の辺を植る

芭蕉堂雙林寺の境内西行庵乃西にいとうるはしくあり

山家集
いにしへころむかしにありける房と申ける上人の庵室にあはれてみけるに翁とおもひてよみける

柴の庵ときくはいやしき名なれとも世にこのもしき住居なりけり　西行法師

小文庫
此うたはむかし宗をともなる僧とかりて西行の山家集にのせ給ふとなんいへる也
住居みやと先その坊形にかりしかれ

柴乃戸れ月やそのまゝあみた坊　はせを

芭蕉翁肖像

わりて安置せる木像八寸計此翁像は翁の愛しける桜樹乃以て門葉乃又老井許六といふ人
きよみのひ大津の智月尼といふ人の後に又それの智月の従者宗
寿尼といふ人の世に我故郷越の方へ持ゆきて越中の国の農家にありて年久しく燦矣を
あり松岡金屋氏のゆゑにて其後富山醫生橘氏といふ人これを求て翁と共に備へ奉りし
より厳右加賀の金府の古良か方へうつりけるを此を乃今の其化房の門

人なりゆへに此命の後遺言にまかせ化房の許に遷しける志ありければ芭蕉翁乃むかし
おもひと基として其外をも堂とさだめ宗匠しけるよし其側に南無庵といふもあり翁の
も此句の謂にかりて名つけしとぞ化房蔵更に会ありける其許六の翁に問
汝床前所にいとこそ此のよし目に見ゆるて指先いまさすると
世のまま像も此庵翁もて知られらし五を絆の古木を
刻まつらせて弟も添へ其の大なる像にわかん
いかにひろくしは尊きなれ此を入れ給ふ

十月三日
翁のたち像に添へき菊もなし　許六

芭蕉翁碑

雙林寺の内西行の塔れ側にあり義濃の東華坊支考これを書し
て建らきし支考翁三月十二日墨直しとして其年あり柳子房の
支流座元呉竹庵わかるとの門派の人と共に濃より上洛して碑文の墨を修補し
蕉門にありて能筵を催しけるとて其碑文に曰
翁師が伊賀の国にうまれて承應の頃より蕉堂の家に住てその先を桃地の黨
とく其乃氏を松尾となる年ねさ四十の老を経てや武陵の深川に世を放
遁れて世に芭蕉の翁とやしる名ありしと道を徒と初めて今日を晴
の変化として継ては遊歴て行脚の便を求むとして居しまれ松浦を
やのかに終ひ象潟へ向ふるの雨に泣とて富士より埒の名に落しる舎
に一字乃沈みとへ古跡にあらへ終とせむる海の鎌ひそ漂泊ともにけるとの
椎葉そ郷跡の浦に世とみられてん其の後れ神は腹の中に二日あらん年
さらを湖水のかなたにかうの魂を止めそかの本曽寺の塔乃下に葬り
名を朽させまし東華坊そこに此碑を造る事は翁の阿西行の法の縁に結びて
遺に七字の心を傳ふるさとなり
あはさら武士の世乃名ちおへ世に墨染の先にそれ人にありあか此わりし世の
言の葉かれ聲ありて其の深川のみかしまれ寿のおのちそ留てしる六もしくなし

ゑてよこふ流るゝ末ハ不の川や此世と後のとゞまりて　その際にうつし　かれ果るに
ひ社風のやうりなし　其の名そうろに　先てそむ　人も見ぬ　乱を難波津の
花とさく　それの讃に　歌そ見ゆる

背文　維石不言　謎文以傳

泰山府君　櫻の名之　雙林寺の入る山東漸寺の庭にあり　櫻町成範卿花の盛を惜みて泰山府君へ祈られしより毎木に暮まで盛久しき櫻をかく銘しけるより都て此かよりハ洛東の佳境にして櫻多し　知恩院の櫻　櫻ハ變色にして世に名高し

花おしそよめる

新古今　花もえさりん甚ハ老ひ生まよされながらへのちろはくして　殷富門院大輔

たれ乃ゑの春そに去ろし東山　正秀

山王社　祇園鳥居の西にあり　傳に三猿の像ハ安阿弥の作なり　此社ハむかし内裏へ強訴の時神輿を振て捨置し故に捨山王といふ　かくて平家滅亡の後ハ日吉の神輿感神院にかくし置しを四月おくりかへさる

玉葉　神代いかに都の月に捨おきてそやかる志賀の古さと　前大僧正慈源

疫伏社　又云此所ハ文覚法師行斎して平家を咒咀せし地なりとかや　所疫神讃曰　降藏貴所を祭なりとそ

蓮華院旧蹟　其地前縁にみえたり　今の東大谷の手入祇園女御の舊跡といへるなるらん

盛衰記云　感神院行幸の御時
祇園の西大門の大路の小家に女のあやしき御幸を拝しまつる　帝御目に留る
御覧有くして還御の後かの女を宮中に召されて后の宮に玉體に近き進らせらる
祇園社の巽に當て御所を造て居られたり　公卿殿上人重き人に思ひ奉て
祇園女御とぞ申ける　中略　今の蓮華院と申ハ彼祇園女御の御所の跡なり

東鑑云　鳥羽院の御寵愛祇園女御ハ源仲宗か妻なり　續世継云　白河院御代に世人
祇園女御と申ハ加茂の社司重助か女にて加茂女御ともいひけるとそ

鷲尾　いにしへ鷲尾中納言隆良卿の山荘今の高臺寺の地にありしとかや　中頃
細川満元の寄進にて鷲峯山と云又當山と岩清不動山といふ應仁の
兵火に滅ぶ　岩栖院の号ハ今南禅寺の内にあり

續古　文永元年　甚鷲の花見ひてよみ侍し附
あれつわすれとそ白く袖ましし代々の昔の花の下風　後嵯峨太上天皇

雲居寺旧蹟　拾芥抄云　祇園の南花園の向にいふ　按るに今の高臺寺の下壇の地
なりん　花園ハ双林寺といひ　雲居寺ハ應仁に亡て今も其所に堂を建て瞻西上人を
著聞集云　祭主神祇伯親定伊勢國にて雲居寺をつくり遊びけるに
請して供養のとけて具布施みて雲居寺の結縁経の後宴に歌合しけるに

九月尽乃と云ふ事をよませける

千載　唐錦ぬさにたちそゆく秋もけふや手向の山路なるらん　瞻西上人

瞻西上人雲居寺の極楽堂に堀川右大臣はゐりて

なまし侍るにつよめる

ほ　いされしれ出る迄ひ無けそ未世へんとみ入抜身哉　俊仲

まま　をむ月とみてのとうかに詠まとて見あるも名のとうかるに　式部重家

天満宮　高臺寺の鎮守之初上壇の地にあり近年是に遷を御自画綱敷の相なり右者
北政所高臺院殿乃御寄附なり祥雲卿の画式に生そり

高臺寺
萩の花
西行法師宮城野の
萩を慈鎮和尚にまゐらせし
其萩今に移て侍りし
を草庵にうつし植へ人
侍し花の頃其園の
人さそひ侍しに
露けさや
風とも
こぼれた此
萩の花
宗祇
小萩ちれ
ますほの小貝
小さかづき
はせを

高臺寺方丈 秀吉公朝鮮征伐しまひて御凱陣の節饗應に設けし殿舎之北にありしを
ここに遷さる中間ハ狩野弘意の筆にして仙人の画東西ハ了慶の画なり

隨求尊 同所に安置ス秀吉公の**千躰地藏** 佛殿に安置ス政所公高臺院殿の御
御念持佛なり　念持佛之巡の松杉の画ハ古右京の筆

小方丈 上段ハ光明皇后乃白菊の屛風とうし松の間ハ四季の松左右の間又を
此花を書く是れ永徳の筆なり又上段にある翠簾下の屛風ハ
紅白乃梅を画く是古法眼元信の筆之住吉行秀の圖乃屛風ハ土佐光信乃
画なり又住吉法下の竹ハ土佐又平の筆之是らの屛風ハ小方丈に常に出た
探幽の画にして雪中の圖之其次の間ハ

小書院 風吹柳を図して古法眼之世に名高し　**數寄屋** 遠州の好なり

秀吉公影像 御魂舍に安置ス唐冠持笏し坐像二尺四五寸許なり
贈號豊國大明神ハ後陽成院の震翰なり

政所公影像 同所に安置ス秀吉公の北政所之法體にて烏帽子をかけ念珠を持し給ふ落飾
の姿に金紋前の花の如くけ右の膝を立玉ふ

菊潭水 御魂舍の前の**安閑窟** 山上の傘の亭をいふ　**政所公塔** 山上にあり
水鉢ハ　利休の好なり　號ハ高臺院
從一位湖月禅定尼寛永元年九月六日薨去　**天哉翁長嘯塔** 山上にあり豊臣若狭守勝俊
捷て具先ハ尾別乃人之秀吉公姻家のゆへに早く拾遺を拝し累て羽林次
將に任し若狭國に封ぜらる故ありて其名を改め長嘯と改め霊山に
住して卜居ある事九二十余年遂に慶安二年六月十五日卒を遺詞によりて
高臺寺山上に葬る

抑當寺ハ政所公の御本願にして慶長の比の御草創之方丈書院魂舍中
門等ハ多く政所公の殿舎をうつしてみな所之花鳥ハ壯麗筆を盡しさく具

奇観の十の一を記すのミ殿ハ別名跡あり又前編にして應照合て是を見るべし

高臺寺十境
白山巓　菊潭水　岩栖洞　蟠蛇池　湖月堂
安閑窟　相呼墳　雙林溪　祇園林　長樂鐘

崇德馬場 古ハ崇徳院宮安井光堂の外にあり後世今の地に遷を初ハ大原にして封境
廣し鳥居ハ東面に立って下河原にあり其道の南北に並樹ありてこれを崇徳
馬場といふ　應仁記云粟田口にハ
長樂寺光堂崇德院と云

桂橋寺 むかし下河原にあり旧地詳ならず此寺の本尊ハ観世音之今四條建仁寺町の辻
仲源寺にあり延世乃謡曲にちいつゝの橋柱と謳ひしを是之

霊山寺 霊山國阿堂の南にあり見聞臆乗抄之元慶八年甲辰建霊山寺
日本略記云寛弘元年三月八日霊山寺供養

本尊阿弥陀佛 惠心の作立像二尺八寸　**圓光大師像** 御自作七十二才の御かたち
法然上人持念佛　長一尺又寸許

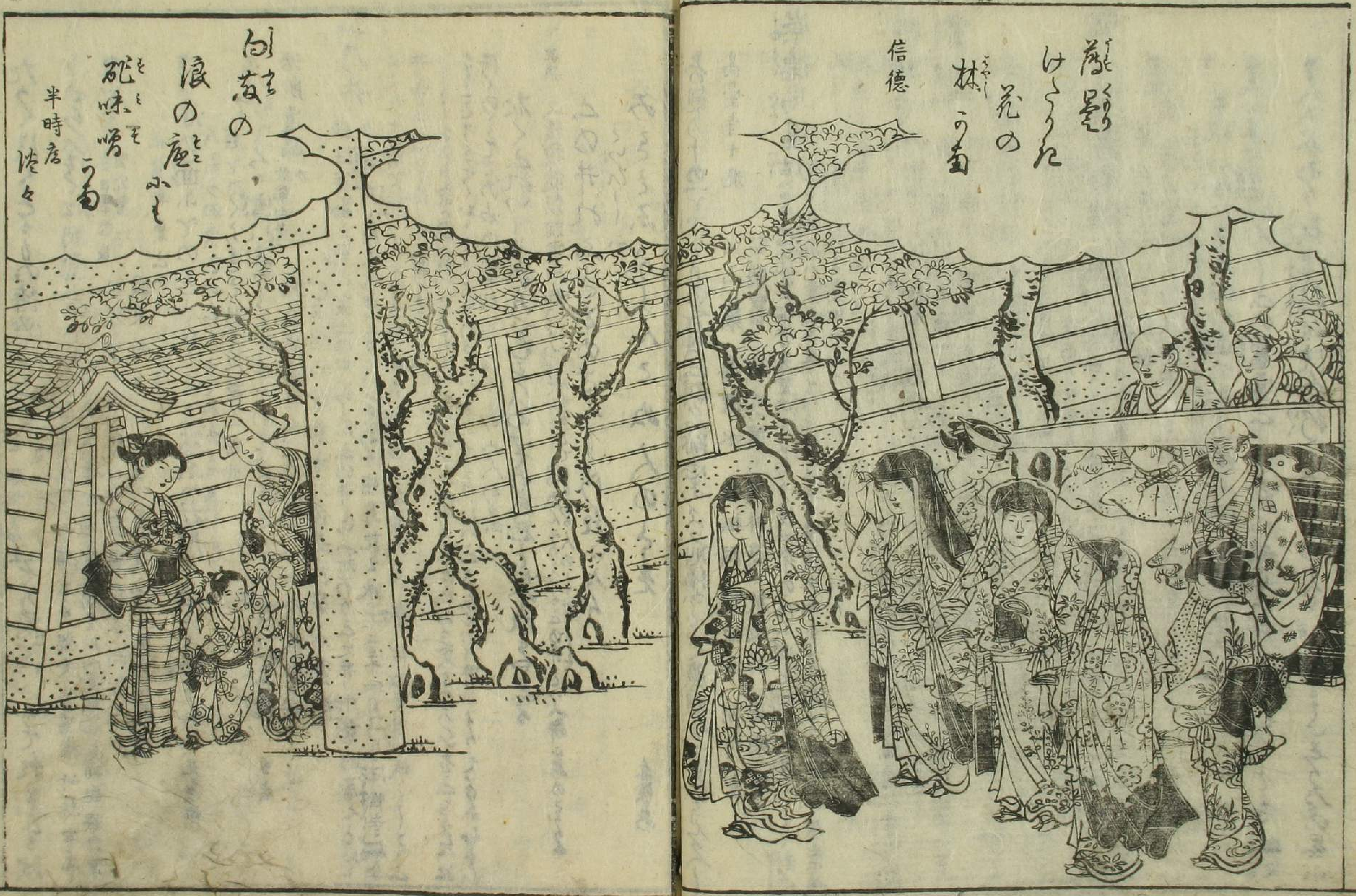
黒谷上人傳云元久二年正月一日より霊山寺にして別時念佛始めたまふ寺説に曰
北霊山寺南霊山寺の二ヶ寺あり中原氏乃寺にして師尚朝臣代々乃墳慶にあり

舉白堂舊跡 霊山惣門の外むかしの上壇の地之是長嘯子の閑棲しける所にして
舉白集に此堂の名を故に名とし次之歌仙堂の跡ハ國阿堂の山上にあり

擧集　舉白堂のまへにある橋にて
年へぬる宿ハさらにのかれなくふちしけハ外れ花を残すらし　長嘯

同　東山にかり廬を舉白と名付るゝ庵ふとく
見わたせハ名利田の面の書の池にかの小島の秋の山かな　仝

東山山家記　豊臣勝俊
ちかくしての葉霊ムとゆへ所に幽居の地をしむることもち
ま人に谷あり長嘯相従ける我とし百さらあまる　寄亭歌仙堂　まさにきる庵の恩に　半日摘笑


藪鶯けゝられ花の林かな
信徳
白菊の浪の庭にも砧味噌かな
半時庵淡々

たかく浅くきこゆるの待宵と名つくと云 胡なりともいふと云 その橋をつくりて紀光生と云

けらひ浅く松洞堂にのこれり 惺窩文集注云長嘯在霊山建松洞堂。 半日 独笑 長嘯橋 竹林 字亭 歌仙堂 松洞堂 待宵 鳥羽観 挙白堂

羅山文集 春日奉訪長嘯公霊山墅 八坂東邉小路分 春風花木向欣之 我来竹下問青鳥 君在山中臥白雲

長嘯軒東山の山荘にはべりて

挙白集 庭の面にとのもよく萩原は松風よりや生始めん　光広卿

あふぎみる霊山のふもとにて和哥よみけるおりふし

愁をさくらまちくもしれ梅上初雪

吹とくる雪はきえかなそめて夕風よりも谷乃紫橋　玄旨

活所遺稿 飲挙白堂水 一路入東山七月寒 佳人世外坐雲端 一盃挙白堂前水 便是仙家承露盤

山乃井 顕注密勘云東山霊山のかたはらに山の井といふ所あり山之井中務乃居之よしあるを今詳ならず又山井寺といふ寺あり明月記云承元二年四月一日法性寺殿今日より十講を始らる三日五部の大乗経入道殿乃御筆にて料紙としくる山井寺に渡さる御預かりとぞ云々

さるしかの日記云四月つごもりかたにゆきへ去ありて東山なる所へまゐりしに山ちかきにはまことにまうでておはしましてまうでつるにいとくるしければ山なるあるいて井によりてすずむとて

とくのそそこのぬのあなたおかゆかしといふ人あるに

わくられつきのあかぬむすびてかねけて今れをやむる

家集 又後頼髄脳記書曰 百とせにつくしてこひしく山の井の底にあるかとみれば見ゆる人のはかなきをよ山の井といふ所にて梅のさかりに

山の井れふてこ本のさくらは浅れにたり

とりひしに

みさとふうらんこぬ人のことを　赤染衛門

藻虫庵旧址 霊山のかたはらにありしとぞ今詳ならず又洛外嵯峨妙光寺の内にも同名あり後世までに紙をもち

ゐし名あり後世まで紙を用ふ 東山藻虫庵は長嘯公の妙寿院にもしくぞしてまふりろはよきぞ浅かつくる

挙白集 あさのあるまで藻にすむ虫の住家へ同ぬにつきて詠ふるむる　長嘯

鼠堂屋敷 土人云三年坂の下路の東なり又さてに一所ありといふあり今詳ならず

盛衰記曰 南殿に鼠の番ふしてつの者を入れてかけろ殿上より人やある人やあると

出て獨見よと仰らる　花園門佐平清盛卿に向て宣旨をとりておもむくる所にいたる鼠

て袖の内に飛入て失り即取進らせて御感にあづかる毛ミウあり足の

乃唐名ともそ其て南殿の竹をめして中に入て清水の墨に墨まれりそのまよう

の時へ勅使を立て宣命をそ合らる毛朱一所ふとへ則足ありと云

経書堂 三年坂乃上にあり聖徳太子ここにおいて弥陀之尊を空中に拝しおはします

坂の上に草創ありしなり其後小石を聚めて道俗男女に法華経を書しめ自

る（?）授けし所なり　解脱の因とす　本尊聖徳太子 安置は末光院と号す　御自作十六歳の像三尺計 側に弥陀之尊像

嫗堂 経書堂の南向にあり金性院と号す三途河の嫗の像を安置す（?）三尺計

運慶の作初へ五條河原の辺にありし愛染明王を安置す

大日堂 経書堂乃南にあり真福寺といふ本尊大日如来は弘法大師の作坐像七尺計 初へ冨小路中御門にありて尊体寺と号す此法を

いふ之へ車寄馬止の 輪蔵 堂内にあり真盛上人蔵経の上巻一巻ツツ取出

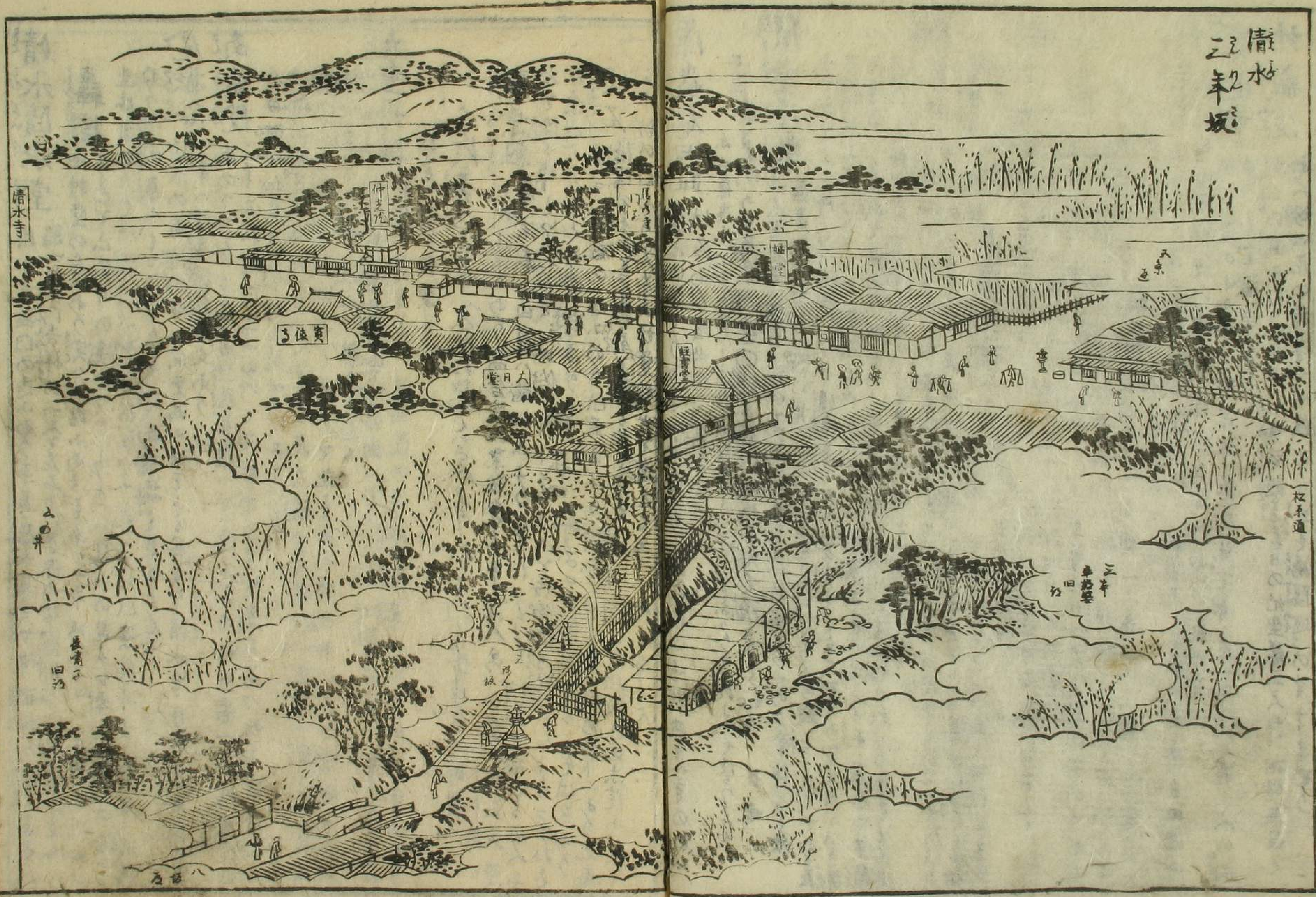
ありし所とぞ 諸人に結縁せしめあり

仲光院 大日堂の南にあり本尊愛染明王 歓喜天を安置す 開基は多田満仲公の臣仲光入道之老寺丸美女御前の二親なり

寶徳寺 仲光院の北にあり時宗本尊阿弥陀佛 是いふふへ一遍上人の開基

地蔵院 馬止の側にあり寶福寺といふ如意輪観音坐像二尺計 相好無倫之

初めへ妙心尼の持尊之後洛陽巡りの身十番なり


清水
三年坂
清水寺
仲光院
寳徳寺
大日堂
五条通
松原通

清水随求堂

清水寺西門の内にあり本尊随求菩薩天竺佛師佛の胎内に安置し
脇士は多門吉祥の二天を左右にす享保の初盛松阿闍梨の建立也

轟橋

田村堂のおまへにあり実は此橋にあらず今二年坂の下に一流の溪川あり
至る道ありて是を山の井の溪といふ 清水の乾より霊山惣門の谷に
ありて此溪川に架したる橋を轟といふむかし此溪深くして大いなる瀧
あり着顔集にも見へたり所謂長嘯橋も是なるべし

尾振谷

清水の南清閑寺の間東西に通ずる谷なり 清水寺境内宝蔵院の中
に南は限尾振谷の文あり

南蔵院

瀧の下にあり本尊虚空蔵菩薩は聖徳太子の作坐像一尺餘南院も
のは大和国内山にありて赤膳寺と号す皇太子の妃膳臣乃皇后
乃母阿比丘尼乃草創也後世ゆへありて此所に移す
此所に鮑貝の酒器ありて常に宮具大器の如く酒を一息中に飲ものの故
嘆一に酒の名と記す故に此酒器の名と洛陽とも
酒に薬して深く遊ぶの謂なるべし

九重丹楓

清閑寺高倉院帝陵の側にあり此佛紅葉を愛し給ひし平家
物語に見へたり 後西院の御製 叡筆の和歌清閑寺にあり

此君の紅葉を愛して

うき旁のなまふ山の紅葉ぞなさけやかけしねとそれとみえてなり

御製

嵯江入楚

秋葉社

同所山上にあり高倉院紅葉を愛し給ふゆへ当所に
篤本巻に曰秋は龍田山より来たるとて紅葉を祭るゆへに
秋を染る神といふと云 世俗此山を勝茂谷月桂のうへよりみれば
秋葉山と云又坊とも云は謬なり

獅子口

獅子口の形に似たるより此名あり

要石

清閑寺の庭にあり此石上より洛陽の萬戸を見おろせば扇を開たるが如しとぞ

覚明水

当寺坂路の下にあり元比叡山の末院にして
二十坊の内にあり大夫坊覚明世を遁れて此に住しけるん

六條院陵

帝陵記云東山清閑寺にあり詳ならず 續紀云治承五年正月
十四日新院高倉己に崩御ありし今夜邦綱卿乃清閑寺の小堂
後鳥羽し奉る 帝は六條院の御墓所の小堂あるをもて 帝王編年記云安元
二年七月十七日新院崩御ありし御年十三号六條院と号し是二條院
の皇子同年三日乙丑東山の
辺に葬り奉る

後京極

宝の院に宝院傍に清閑寺の山荘にまかりて
帰りて後朝花といふ事をよみ侍し

此さとはねるかる宮もひとつにて軒端にとめむ山さくら哉

頓阿

延年寺辻子

清水寺六坊の側より西大谷に経る細道也此道の南に谷あり是を
延年寺谷といふ 塩嚢抄曰坂上田村麿鹿を獵て此所に来つ
奏選流水坂見る今延年寺谷といふ所之即此坂也 その跡の下に至る
東鑑曰建仁二年七月十六日在京の御家人等を催遣し東山延年寺に於て播磨
守頼全坂瀬ひ出き坂誅戮せしむ 盛衰記云清水寺合戦に永万元年寺僧
今は防ぎ戦ふに力なく赤染地延年寺二ツの間道へそ落行ける
本願寺傳記云東山の西の麓鳥辺野の南延仁寺に葬し奉るとて云
其狭むるに親鸞聖人御葬送の時は宗旨の寺頽廃して無常所の地名と
なり俗称して仁と謂傳ふるなん 譬は今万寿寺通を万じヤウじと云を建仁
寺町坂ケンニ子ジ町といふが如し

日親廟塔

此山に本法寺の塋所あり猶ほ十世日通上人霊夏を崇て日親
真筆の題目塔坂塔是なり今廟所にあり日親は姓は平氏長享
二年九月十七日八十二才にて寂す法義の為に苦辛して
世に鍋冠日親といふ

通妙寺

同所にあり法華宗妙傳寺に属す開基日聰上人寛永年中に草創を
是より二町計東に近年妙見堂を建る

鳥邉山本壽寺
妙見堂
日親像
拝所
開山塔
本堂
番神社
茶所
日親廟
臺所
裏門
表門

後京極良経公塔 鳥辺山要法寺墓所に至る道の右岸の上にあり傍に標石あり後京極摂政良経公之墓と鐫る烏石の筆

藤原良経公之墓在于洛東要法寺而歳月悠邈荊榛荒涼不可復識也享保年中並河生奉大樹鼎命脩畿内志時斷木以表而今也朽矣明和二年春烏石葛辰翁偶遊此地嘆其蕪穢且悲懸碑之吟乃誅榛莽荊脩治墳墓新立標石祭以香醪且賦詩藏于其寺住持日慈感翁之志請書其事予於是識 赤水藤原岳尚撰 蒲野谷豐書

法國寺 五條大谷にあり時宗本尊阿弥陀佛は安阿弥の作立像二尺五寸 額曰當伽藍者江州小郡淺井備前守息女亜相秀頼母公為二世安楽建立也云々本堂は大佛殿建立の殘材を以て建る之書院は新上東門院の殿舎を御寄附しあり

袋中庵は新南方にあり本尊阿弥陀佛恵心の作坐像二尺五寸計又法然上人張子の御影あり熊谷蓮生の作坐像一尺計又聖観音は東の小堂に安置す當庵は梅檀王院袋中上人隠棲の地なり初め東山菊淵にあり其後大佛尾町にうつし又ここに移す今女僧住職す

赤築地 五條大谷口より松原経書堂乃あるに出る道をいふ土人赤辻と呼し 知恩寺縁詞傳云文永の比聖光坊弟子然阿弥陀佛勢観坊弟子蓮寂房と東山赤築地に於て四十八日の談義を始む 盛衰記云清水の僧赤築地二の関乃へそ參り侍

安祥院 五条大谷口の坂口にあり宗旨四宗兼学梶井御門跡の法流にて靈元法皇の勅願所 後西院の御牌を安置す

本尊阿弥陀佛 恵心の作立像 又尺七寸又歩 開山木食養和上人 姓は村上氏駿河の人也此人慈悲深くして驛路の行人牛馬の苦辛を憐しを日岡峠谷坂おのく高サ九尺坂路穿て坂路の嶮しきをやはらけて不易の勲功坂積あり又は因幡堂乃石橋七條八町暖の二箇の石橋御所八幡乃敷石炬火殿の井戸其外橋を架し道を作り上人一生涯の中かくのごとく作りこと持戒圓満乃積功顯然たりと謂べし 抑當寺は西本願寺寂如上人の室梅香院殿の御本願にして享保年中乃建立也木食上人は老後日岡峠に梅香庵を營みて退隠して終をとられし

西光寺 安祥寺の北松原通の南側に浄土宗知恩院に属す初め山科東野村にありて空也寺と号し大雲院九世高誉上人再興して今宗と改寛延二年今の地へ移す

本尊阿弥陀佛 安阿弥の作 空也上人 自作立像 立像三尺計 一尺七寸

空也上人廟 本堂の北にあり中に石櫃あり蓮花を鐫る傳云遺骨を納む傍に石碑を立つ撰者は鷲巣高泉和尚なり

聖観音 空也上人の作本堂北の脇壇に安置す朱雀帝の皇妃熙子の御安産御祈祷乃為に作り給ふしく具傳文を腹内に收む

六字名號 空也上人の筆一生涯の中に七幅書き給ふ其一幅なり

其の歌をよみ侍る

新撰 有漏の身は草葉にかゝる露なるをやがて蓮にやどらざりけむ 空也上人

阿佛家 六波羅密寺のひがし南側にあり世人阿佛屋敷と云 前栽に小祠あり

うたゝねに云ひとつけぬたよりもなくそれのちかきあたりへうつりけるも見出くちくろうひあんとぞ

西福寺 六波羅密寺の門前にあり浄土宗本尊阿弥陀佛 春日の作坐像三尺許 四十八願所巡りの卅一番之又土仏の地蔵尊を安置す弘法大師の作

焔魔堂 同所の側にあり小野篁の作世に篁王の像といふ古は愛宕寺の境内の入口なり此所より六道の辻といふ焔魔堂は百練抄にも見へたり

六道迎鐘 珍皇寺にあり毎年七月九日十日于蘭盆會に出て諸人に撞しむ聖靈迎鐘と称す此鐘ハ慶俊僧都むかし鋳て土に埋しめ三箇年を経て堀出せと云おきしより寺僧に預して入唐しけりぬ其後別当ありて三箇年を経法師二箇年を待たずして堀出し撞けり其聲唐土に聞へけれハ慶俊僧都大に歎して曰此鐘人の撞ざるに自然に鳴さんとおもひけるに早堀出せし事の口惜さよと宣ひける僧都ハ弘法大師の祖師なりとぞ古事談或ハ今昔物語にも見へたり今も此鐘ハ遠境に響く事他に並びなし希代の霊器なり

今昔物語云于蘭盆の日あやしき女の祖のために志ある物の衣を盆に入て頭に戴て人に序ふて愛宕の寺に持参りて拝ミ泣く去ぬ見ける人あやしと思ひてこれをうかゞひ見れバかくぞ書たりける

奉てまつる蓮の上乃奉えうるきれども衣とこそ世の供も

城東寺 建仁寺町松原乃南にあり本尊ハ丈六の薬師佛を安置す傳教大師の作なり應仁の乱後此尊像破壊して纔に御首計残りしを後世仏工添て今ハ丈六乃像となし小堂にあり初メハ天台宗應仁年中に禅宗となりて南禅寺楞嚴院の兼帯所となる

平教盛卿家 五條大黒町の北の町なる小門町といふ是六波羅館の小門之委ハ前編に見へたり

平家物語云宰相教盛ハ中ハ入道相國の御舎弟宰相ハ六波羅惣門の脇におはしければ門脇の宰相とぞ申ける

上行寺 五條建仁寺町乃東にあり法華宗開基ハ日秀上人本願ハ織田左京助信定慶長十六年の建立也初メ此地に住し日経上人他宗と法論し騒動に及ぶ是によりて公勢より慶長十四年二月廿日日経上人の徒弟五人と共に六條河原に於て劓刑に行る故に劓寺といひて行く者も驚影しく元和元年十二月に後水尾院の編旨を賜ひて今寺あるに至り除かの所々題目乃石碑都婆を建るハ此日秀上人他宗乃門徒ともを巡拝するを御塔巡りと云

牢岸 若宮八幡の南音羽川の岸をいふ傳云慶七去清京清禁獄の所なりとぞ今牢谷といふ此地に敷石あり是獄屋に用ひし所なりといふ

専定寺 大佛の西側にあり浄土宗本尊阿弥陀佛ハ恵心の作

六万躰 彫刻の円経のある像之

獅子地藏 小野篁の作元禄の比伏見谷左近といふ者此尊像を帰依しある時吾妻の方へ赴くに大井川をわたる所その一町半漂流を具時地蔵尊を獅子と化し逃に命をたすけけるそれより世乃人獅子の地藏と呼ぶ

鈫宮 新熊野の南林の中にあり祭る所白山権現第一皇子

雲龍院 泉涌寺の塔中也泉涌水の上にあり佛殿の本尊薬師佛坐像二尺五寸後光嚴院後圓融院二帝の宸翰を安置す又同所後光嚴院後圓融院後小松院の三陵あり當院ハ泉涌寺より古来の塔頭之開基ハ竹嚴律師

来迎院 同所方丈の北にあり佛殿の本尊ハ弥陀三尊佛運慶の作又荒神を安置す弘法大師の作當院初メハ弘法大師中興ハ智鏡和尚なり

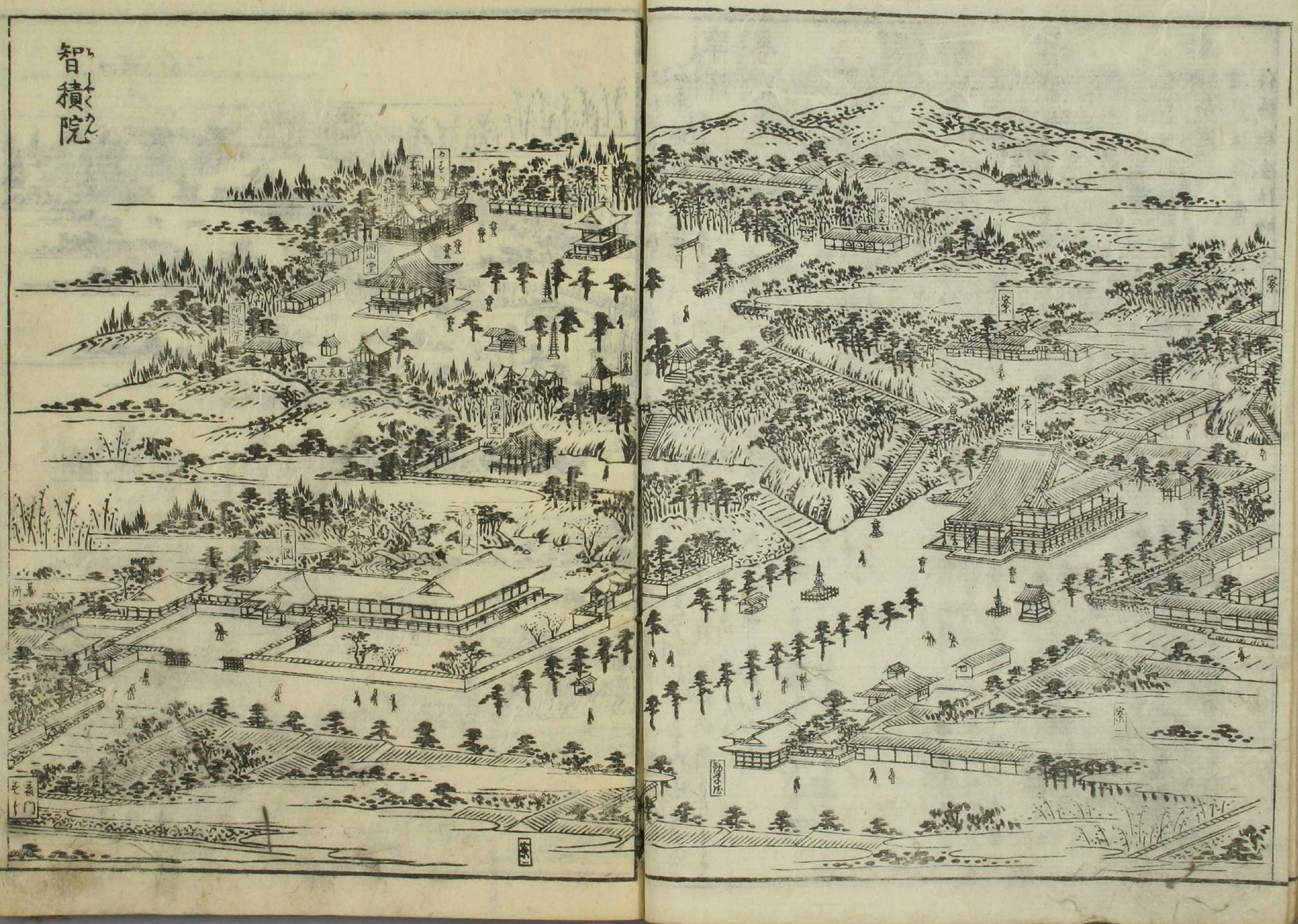
荒神社 石鳥居の傍にあり弘法大師獨鈷を

獨鈷水 もつて穿ち給ひし所湧出るわきなり

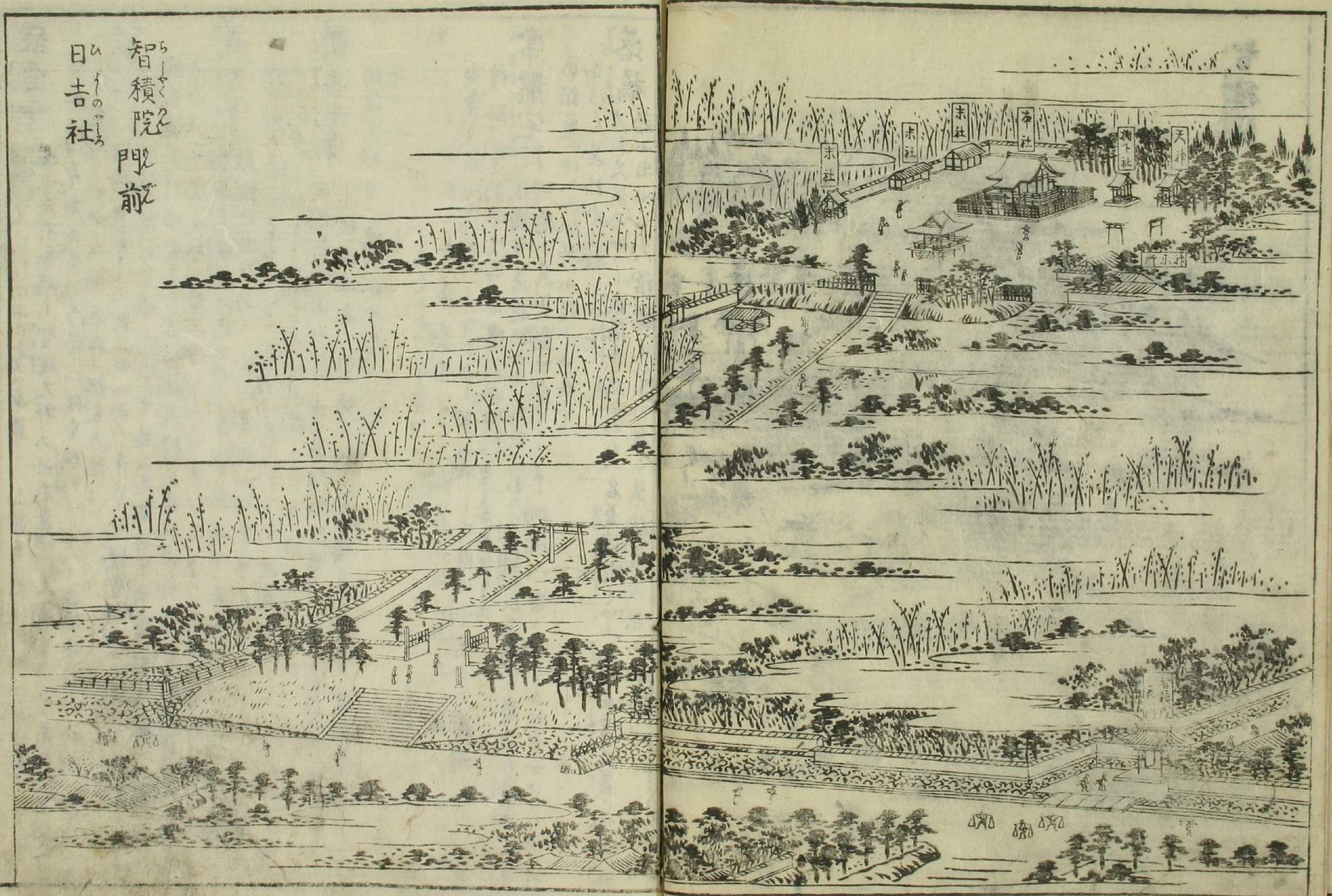
○當院の智鏡和尚宋に入て懇志ある蜀の隆蘭渓来朝の初メ止宿ある所なり

○信長公大坂乱職の時甲冑の上に数多念珠小蓋を任持鍵ト南に賜ふ今尚寺費にあり

安樂光院 同所来迎院の西にあり本尊阿弥陀佛初メ上京小川上立賣にあり今安樂小路といふ是持明院基頼卿の宅之後世寺となりし中興ハ誠蓮法師當山再興ハ寛永年中にて住職微妙法師なり



智積院（ちしやくゐん）



智積院（ちしやくゐん）門前（もんぜん）
日吉社（ひよしのやしろ）

観音寺 同所来迎院の北にあり本尊十一面観音は弘法大師の作立像二尺計脇士左不動明王智證大師の作右毘沙門天運慶の作当寺草創の本願は山本左大臣なり花山法皇興行しめる西国巡礼の札所観音の其一員にして世人新熊野観音と称す

善能寺 同所観音寺の乾二町にあり本尊聖観音稲荷大明神老翁に化して作る所之立像二尺三寸脇士左稲荷大明神稲荷が為に老翁の作なり故弘法大師の作なり右弘法大師立像二尺計稲荷大明神の作なり傳ふ此本堂を初八條二階堂に安置る所なり前編に見へたり

戒光寺 泉涌寺総門の内にあり本尊釈迦仏立像一丈六尺傳ふ頭面を自然の出現なり開山曇照和尚宋国より持来して其作は運慶なりとそ当寺初めは猪隈八條にありしを今戒光寺町といふ其後上京所々にうつり正保年中今の地に移して泉涌寺に属す

新善光寺 戒光寺の南にあり本尊阿弥陀仏一光三尊信州善光寺に同し後堀河帝名一坊に勅して鋳させしめ玉ふ紫金仏なり初めは洛陽大宮通一条の北にあり後世ここにうつせり

悲田院 新善光寺の南にあり本尊阿弥陀仏立像二尺五寸計当院は聖徳太子乃草創之元正帝養老八年に鰥寡孤独の輩及び病者を救ひ玉ふ所なり施薬院悲田院なりいとまへ其足に微して後世光然上人再興し又如周律師中興してここに遷し配下八ヶ寺のうち泉涌寺の

常盤宅地 泉涌寺落橋の北半町計にあり義朝亡ひて後常盤御前漂泊しける時遂に其美艶を賞して平相国入道の妾となせしかの六波羅の館近くゆく人に此所に住しめ玉ひし

落橋 あらん其地今藪となる大和大路の東より泉涌寺路にあり一名迷ひ浮橋といふ幻化無常の義之源氏物語に出世に大路橋といふは非也薩戒記に出たり

瀧尾社 大和大路一橋南爪にあり祭神藤杜の属社なり額瀧尾社篆字例祭六月廿二日

五葉辻 瀧尾社の南の辻をいふ是則いにしへの泉涌寺門前之後中記云仁治三年正月廿五日今夜四條院御葬礼経五葉辻入御泉涌寺云云

三聖寺 東福寺北門の内にあり身一門に金剛力士の像あり長八尺計運慶の作此像霊験の事太友興廃記に載を初めは紀業に在しを此門の中央に石あり是は獅子の形之乱世に破砕れ今尚石に獅子毛の紋あり牛馬畜之のまて五又き来て此石に觸れば悩は難遁病を除くとありとそ

愛染堂 仏殿の額 修正 本尊釈迦仏左迦葉阿難開山宝覚師像 同所の西街道の東側にあり本尊は運慶の作之同所に五大尊坂安置せし当寺は東福寺より初めの建立にして天台宗なり

万寿寺 三聖寺の内にあり九重山と号す初めは樋口通万里小路にあり永亨六年回禄の後此地にうつす五山の一員之開祖覚空禅師

後成御墓 東福寺塔頭南明院にあり又浄如尼墓あり此事は後成卿の御母とそん

自然居士塚 東福寺東南の山にあり或書に曰自然居士は和泉国日根郡自然田村の産なり故に名と次始は法相を学び後禅宗となつて南禅寺大明国師の弟子となる聖一国師の為には孫弟之東山雲居寺に居して群生を聚め説経して歌舞をなして其深心を断東福寺の龍吟庵は大明国師乃本庵之此あたりの麓に自然居士も葬らく捿みしとぞ

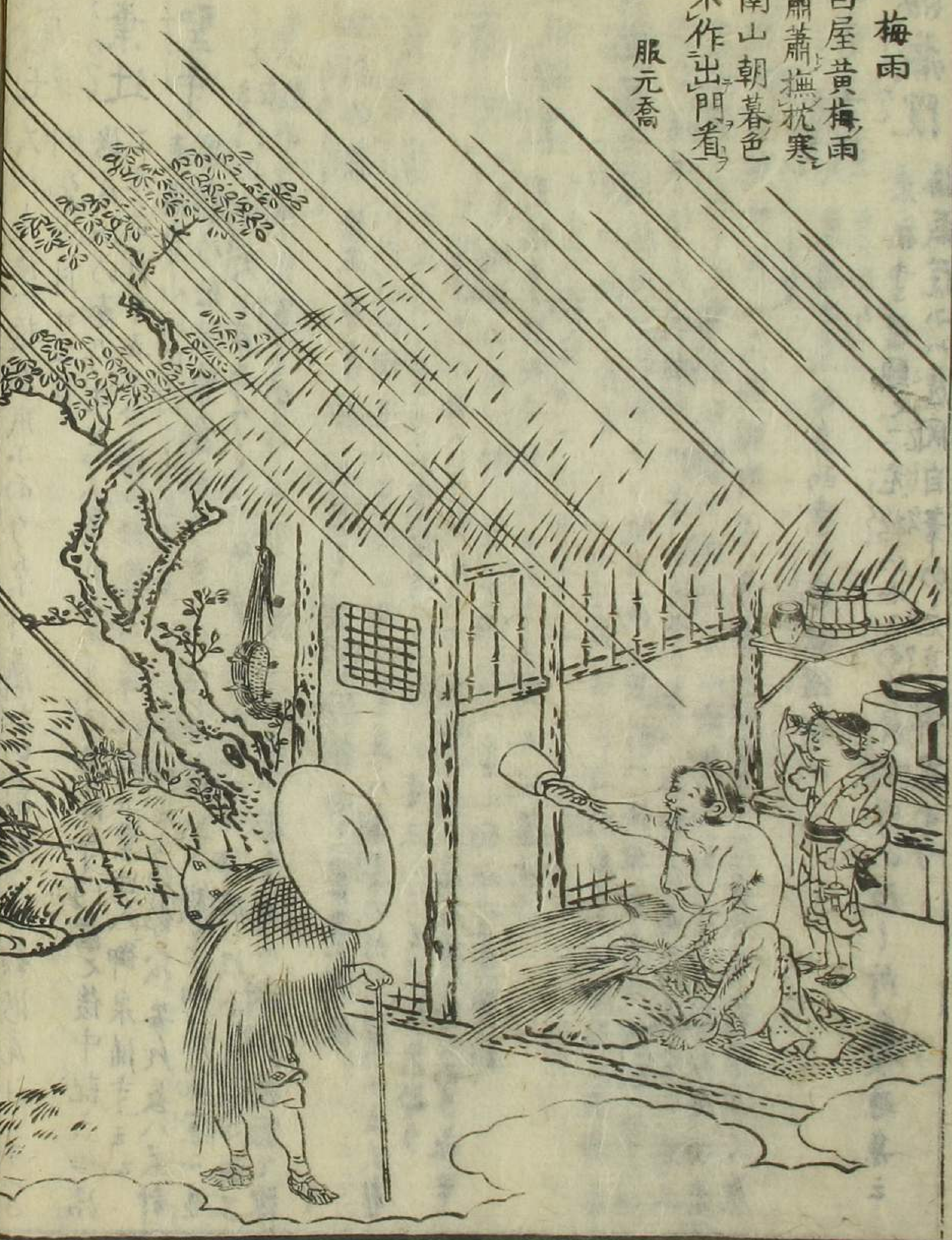
西寺古鐘 東福寺にあり西寺は守敏僧都の寺なり

海蔵院 東福寺塔頭之二老桜の北にあり虎関師の住し所之碩碑集云海蔵院にては虎関自筆の元亨釈書あり

梅雨

白屋黄梅雨
蕭蕭撫枕寒
南山朝暮色
不作出門看

服元喬



郭公の名所ハ新熊野[illegible]のかうかハいふと

新古今

さみたれの
月ハ
つれなき
み山より
ひとりも
いつる
郭公[illegible]

定家

月輪（つきのわ） 東福寺の東より泉涌寺に至る所をいふ。兼実公の山荘之月輪右大臣と号す。東福寺四至の文云、東ハ月輪殿の垣路通を限ると云

月輪といふ所にまかりて侍りしに庭の花の散りそめたるを見てよみ侍る

続拾遺　花の盛とはれし庭の面にぞちりもうけぬ波ぞたちぬる　経宣

同　ゆきの日に樵の宿をとひてゆく人もなく月輪にくへかへりける　輔親

玉吟　月輪に居侍る頃に
秋のねざめの山風にこの葉は立田に散るらしてぬけ　家隆

光明峯（くわうみやうぶ） 東福寺方丈の東うしろ

光明峯寺趾（くわうみやうぶじのあと） 東福寺僧月輪の奥にあり。昆沙門谷ともいふ。本尊ハ今東福常楽庵の閣上にあり。聖一国師年譜云、建長四年二月廿一日藤丞相道家公薨。年六十歳。四條院の外祖光明峯寺に葬る

光明峯入道摂政の墓所にてよみける

続拾遺　哀なり苔の下にも忘られぬ鶴の声をもしたへさりける　九条右大臣 摂政太政大臣

地蔵堂（ぢざうだう） 三聖寺の町にあり。立像八尺計、張子の像也。近年遷之。又腹内に坐像一尺計、定朝のつくりし地蔵尊を安置す

法性寺旧蹟（ほつしやうじのきうせき） 拾芥抄に曰、九條河原にあり。是今の九條里の東なり。其の字に阿弥陀堂の名あり。当寺の本願ハ摂政太政大臣従一位忠平公也。天暦三年八月八日薨。昭宣公の長男にして諡号貞信公

法性寺観音（ほつしやうじくわんおん） 東福寺北門のうちにあり。三面千手観音を安置す。長一寸八歩。腹内に八臂の弁財天、頂に二十五面あり。此本尊ハいにしへ法性寺諸尊の内也。左辺に三宝荒神、右辺に……。廃してより旧號によりて再興を洛陽観音めぐりの第廿二番也。今浄土宗なり

後大納言為世人々にさそひて法性寺に花見にまかりて十首歌よみ侍りける中に

新拾遺　家津には打はるかしてろに椋さる山桜の雅　為明

家集　法性寺の花を見てよめる
ちりしける花見る時ぞ思ひ出るそゆかしぬる庭のをしきを　光俊

源氏物語 あつま屋の巻
秋を経ぬほうしさらしの行かれてまたに

羅刹谷（らせつこく） 東福寺と泉涌寺の間の谷也。元亨釈書延暦寺源心伝に出たり。又泉涌寺八景の題に羅刹残雨あり。又東福寺旧図にも見えたり

薬師堂（やくしだう） 法性寺金堂の本尊なり。傍の小堂に役行者、弘安年中……。伏見大和大路之橋小爪にあり。本尊薬師佛ハ丈六坐像、春日の作といひつたへり

遣迎院（けんかうゐん） 同街三橋の南二町計東方にあり。本尊阿弥陀佛ハ恵心の作立像。之天尉京極遣迎院の兼帯所也。此地ハ証空上人始めて居住す

安倍晴明塚（あべのせいめいづか） 同所遣迎院の南にあり。此地居住せし所なりといふ

独鈷水（とつこすい） 同寺にあり。門前坂上の井町下之井町といふ

毘沙門堂（びしやもんだう） 遣迎院の南一町計東側にあり。是も法性寺伽藍佛なりしを、今此所の町中にうつしとる

田中社（たなかのやしろ） 同街三橋の南三町目西方にあり。祭神稲荷五座の一神なり。世人稲荷叔母乃神なりといふ。古ハ田野の中にあり。故に名づく

古今著聞集 和泉式部志のびて稲荷へ参りけるに、田中明神のかたほとりにて時雨のしければ……
ちはやふるいなりの神の……

武部なしの方をみいでてかくうらるに大きやかなる声のみ妙にてきこしるみ
えれとなれは何者ぞといへでは山みまふりてせうえとらひてさしかなるとひろぎそこれぞ
将母なる稲荷の山のお祭りてあをかりしより云ひそめてこれ
と書られきう武部あつれと云ひて此事をよひてれくへとこえてよひつきろるとなん

極楽寺 同街田中社の南東方にあり本尊阿弥陀仏 鑑真の作長三尺計 脇士焔广王 地蔵尊 源州極楽寺の旧號をつくふ 今再建にて

十王堂 門の外南にあり本尊ハ焔魔王なりて十大王弘安年間此南の町に弘法大師の掘しめ守ハ井あり具府の土をもつて十王を作りのみをそ

稲荷山 枕草紙云いなりにおもひをこしてまいりうるに中のみやしろのかたとりかくくるしきを念んしてのぼる

壬二集 稲荷山杉の底れ明かの窓よりかよふさや簾の聲　家隆

家集 独のミ我哉かくに稲荷山春の霞乃立かくれらん　貫之

稲荷御神詠

続古今 しるしなき人の祈をてらすとそ浮世にのこる三河の燈

稲荷坂 新撰稲荷大明神の御坂となん 順路より稲荷三ツの峯へ詣る道なり今車坂くいふ是いなりへの 稲荷行幸の車此道を経るとそ田中社よりいなりへ此道にあり

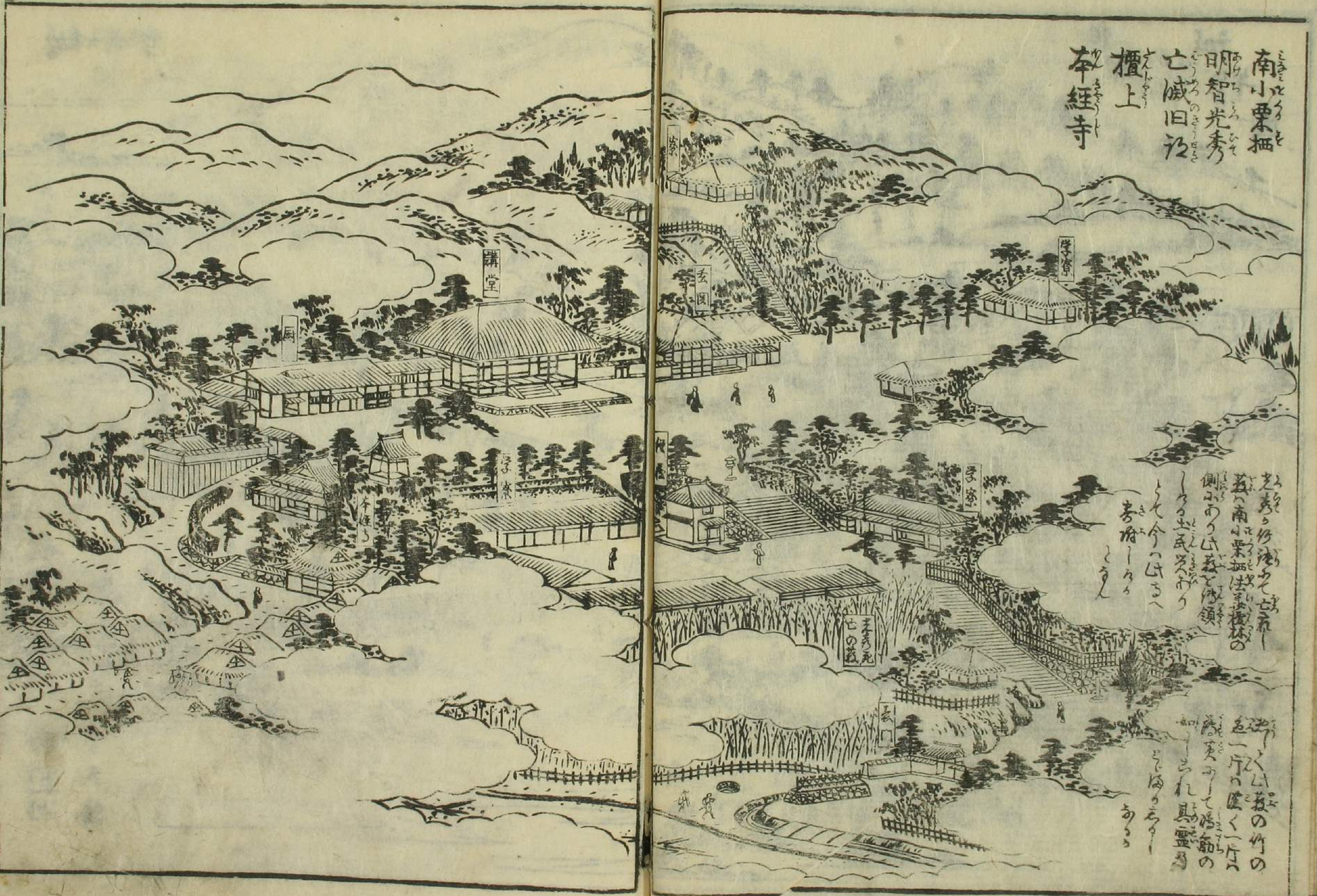
堀河百首 とにかくに宿を出ていなり坂のかれなるこそ人の那　兼昌

異本應仁記云文明二年醍醐山科八ニ宝院の御領なりしかハ合力せしく赤松武田相知へしらせて五月日随ふ多賀豊後守高忠か従者骨皮左衛門尉道源山科より稲荷山へ打越社参倉出羽守と示し合せ上乃社に陣を取る伏見木幡藤森三栖深草竹田名を法性寺に路まて目の下に見おろしけれど大略郷人降参しける

還坂 是稲荷坂の別名也花山法皇清少納言など此道より三ツの峯へ詣 来旧記に分明なり
閑居友云ちかころいなりのかへり坂の岸のうへにあやしけれとも家所うちしつらひておひさしき入道をなんすみける西にむかひて日夜おこたらず
がこさわくとなくあり
定家卿文書云法性寺後成恩寺御廟山林の年来りしハ上のいなりのかへりさかのみち成かへりさかのそとり南への谷をかへりてこ小ハいなりのかへりさかのみち成
かへりてこ
杜家略記云御蔵貴所稲荷山に居して護法形を現して花を採る所 真言傳云稲荷山僧正峯ハ権僧正壹演行ひ給ひし旧跡となん申伝ふ
社家説云今山間に神座の跡ありこれを御前の渓といふ此渓の上に
岩あり雷岩となつくむかし神僧ありて雷を呪して此岩洞に禁る
なり又房崖といふ所ありいなりへの
僧房の跡なるらんか

谷池 本社より行あかりし五町計にあり
谷の名詳ならす
〇池の面にうきをなかるさハ稲荷の三河の御垣に波やとるらん
沢下ハ稲荷山を越て東の藤森山科郷西の谷より栗栖郷
小野勧修寺を経て花山より小に至る

稲荷山初午圖



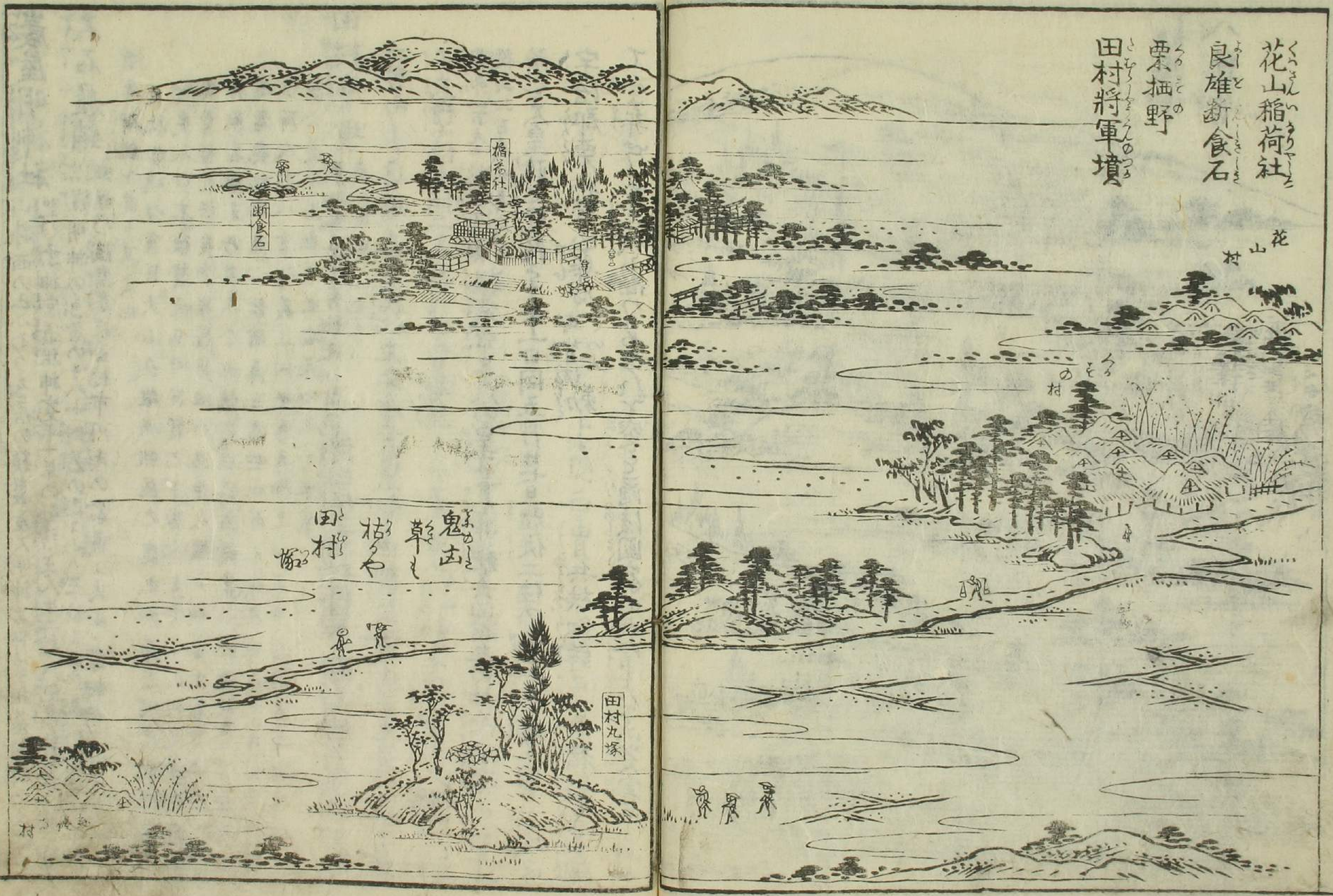
南小栗栖
明智光秀亡滅旧跡
檀上
本経寺

光秀ら何池にて亡され
茲ハ南小栗栖法華檀林の
側ふあり此墓を湮領
しろ土民ヱわり
とそ今の此ちへ
寄附しるる
とうし

亦かく此墓の竹の
邑一町ハ隆く一片ハ
落葉あして陽節の
如しされ其霊乃
そ彼りをう
あらう

勧修寺
氷室池 十五勝
仏殿
経蔵
忘帰亭
白花渚
仙人石
臥牛石
中門
表門
玄関
家中

勧修寺
八幡宮
三條右大臣
墳
百人一首
名にしおはゞ
あふ坂山の
さねかつら
人にしられて
くる
よしも
かな
伏見乃


花山稲荷社
良雄断食石
栗栖野
田村将軍墳
稲荷社
断食石
花山村
くるすの村
鬼迯 草も 枯るや 田村塚
田村丸塚

巖屋明神社 山科西の山にあり名居の類巖屋大明神石野宰相基顕卿の筆社記曰祭神宮道祖神寛平十年の勧請土人生土神と例祭九月十六日神楽三基

大石屋鋪 岩屋明神の鳥居の東入ル側藪の内にあり大石内蔵助良雄隠棲の家断絶乃後潜居した當村市川氏の家蔵に大石が遺物ありといふ

近年碑銘を建る其文曰

是故赤穂侯重臣大石良雄所假居之處也如其忠精光諸既傳而膾炙人口不復贅焉嗚呼百載之下并人与骨皆已朽矣雖則并人與骨皆已朽矣乎岩履并地而思并人凛々如有生氣豈非其忠精所激名聲不朽者乎今也鐫石以誌焉顧當后之過此者乃有感以従焉矣銘曰焦心飲膽薄言潛跣死而不死名姓永光建石者為誰武府人孫八宮部義正同所恵五郎上田正並書之者為誰伏水人龍公美子玉也干時安永四年乙未冬

田村麿墳 栗栖野村の南勧修寺道の東一町許にあり

傳曰坂上田村将軍ハ贈大納言苅田丸の二男にして嵯峨天皇弘仁元年に正三位に叙し中納言に任し同年九月に大納言兼右大将に任を同二年五月廿三日奄然として薨す年五十四勅て綿物を篇ハ絹六十九疋調布一百段商布四百九十端米七十斛役夫二百人延喜式出桓武帝第八の皇子葛井親王ハ田村丸の妹全子女御の誕生ふ所之天皇政を聴ざる事一日同五月廿七日贈従二位の宣命を賜ハ同日山城国宇治郡栗栖野に葬は馬背坂といふ勅によりて甲冑兵杖劔鉾弓箭糒塩等を調て合葬せらる王城に向ひてあざれと定を爾後国家の非常天下に災害ある時ハ塚の内鼓をうつがごとしあるひハ雷電のごとしと云ふ田村将軍現存の時ハ軀け長五尺八寸胸乃厚一尺二寸向ふて之を見ハ偃るが如し背て之を見ハ俯るが如し眼ハ蒼鷹の眸を欺き鬢ハ黄金の線を絡るが如し重きる時ハ二百一斤軽きる時ハ六十四斤動静機に應じ軽重さてに任を怒る時ハ則猛獣も忽斃る咲む時ハ則稚子も早懐く面色桃花の色ありそして常に紅之到節性を持ひ松色冬を遂て獨翠之武術ハ世に揚げて勇感人に踰ゆり中華の文を学で張良が武略蕭何が仁智を兼たり或曰坂上田村麿ハ毘沙門天の化身にして国家を擁護したまふとぞ聞えし

野邑山 小野の里小野の南にあり小野小町年老て此かくれ住しといふ土人謬て疱瘡山とよぶ

著聞集曰

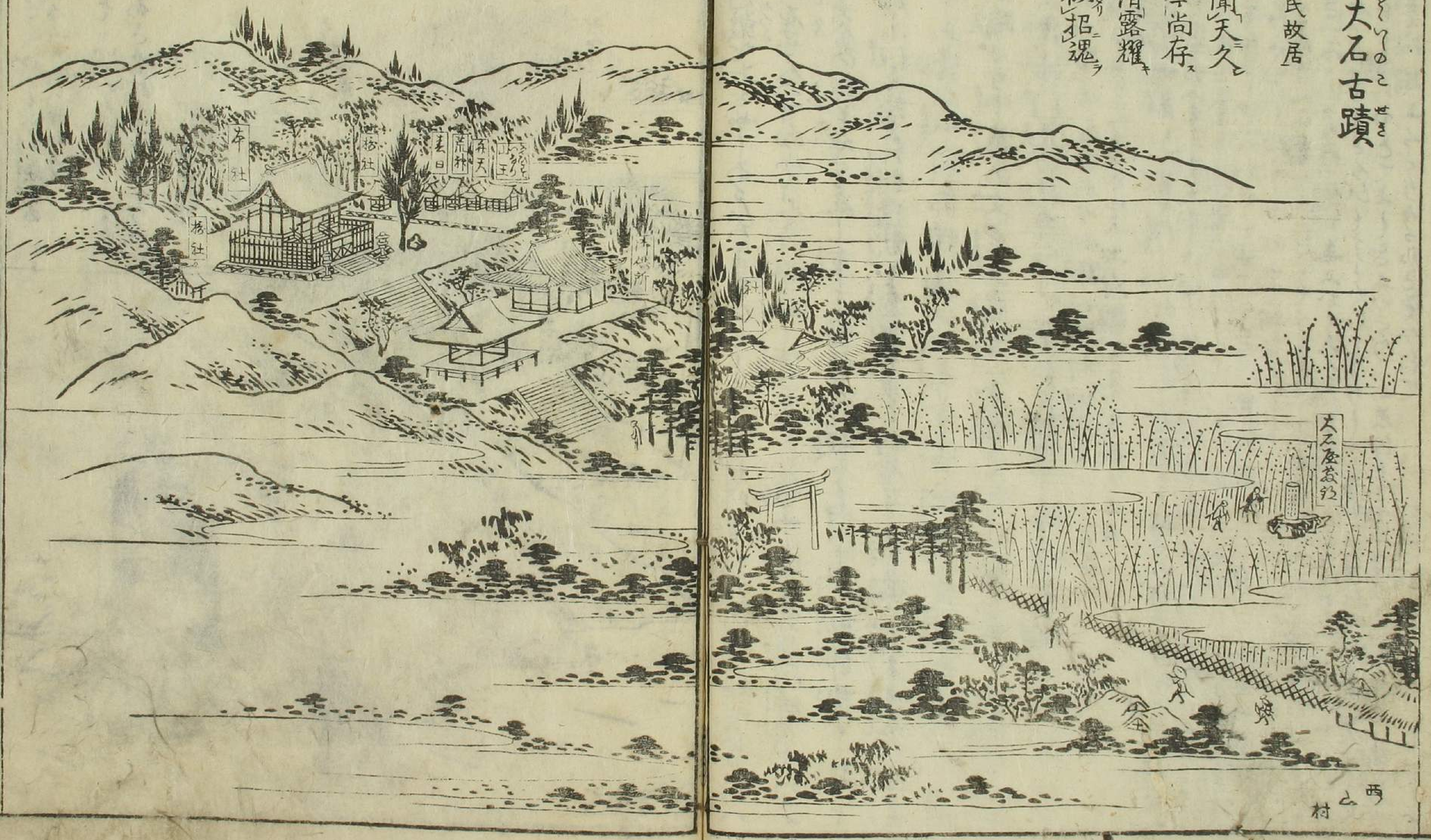
小野小町若くて色を好しとれいそ家しなわあさはさくひあまりなるは壮衰記といへるものに云三皇五帝の妃も漢王周公の妻もいまだこのおごりをなさずとぞかきたる衣にハ錦繍のたぐひをかさね食にハ海陸の珍物をとゝのへ身にハ蘭麝をうつし口にハ和歌を詠じて万乃男をハ賤くのみ思ひくだし女御后に心をかけたりし程に十七にて母をうしなひ十九にて父におくれ廿一にて兄にわかれ廿三にて弟をさきだてしかバ単孤無頼の独人となりてたのむかたなかりきいみじかりつる栄日毎におとろへ花やかなりしかたち年々にすたれつゝ心をかけたるたぐひもうとくのみなりしかバ家ハやぶれて月のみむなしくすみ庭ハあれてよもぎのみいたづらにしげれりかくまでなりにければ文屋康秀が参河の掾にてくだりけるにさそはれて

山科大石古蹟

題大石氏故居

忠精聞天久
英風今尚存
月明清露耀
此夕似招魂

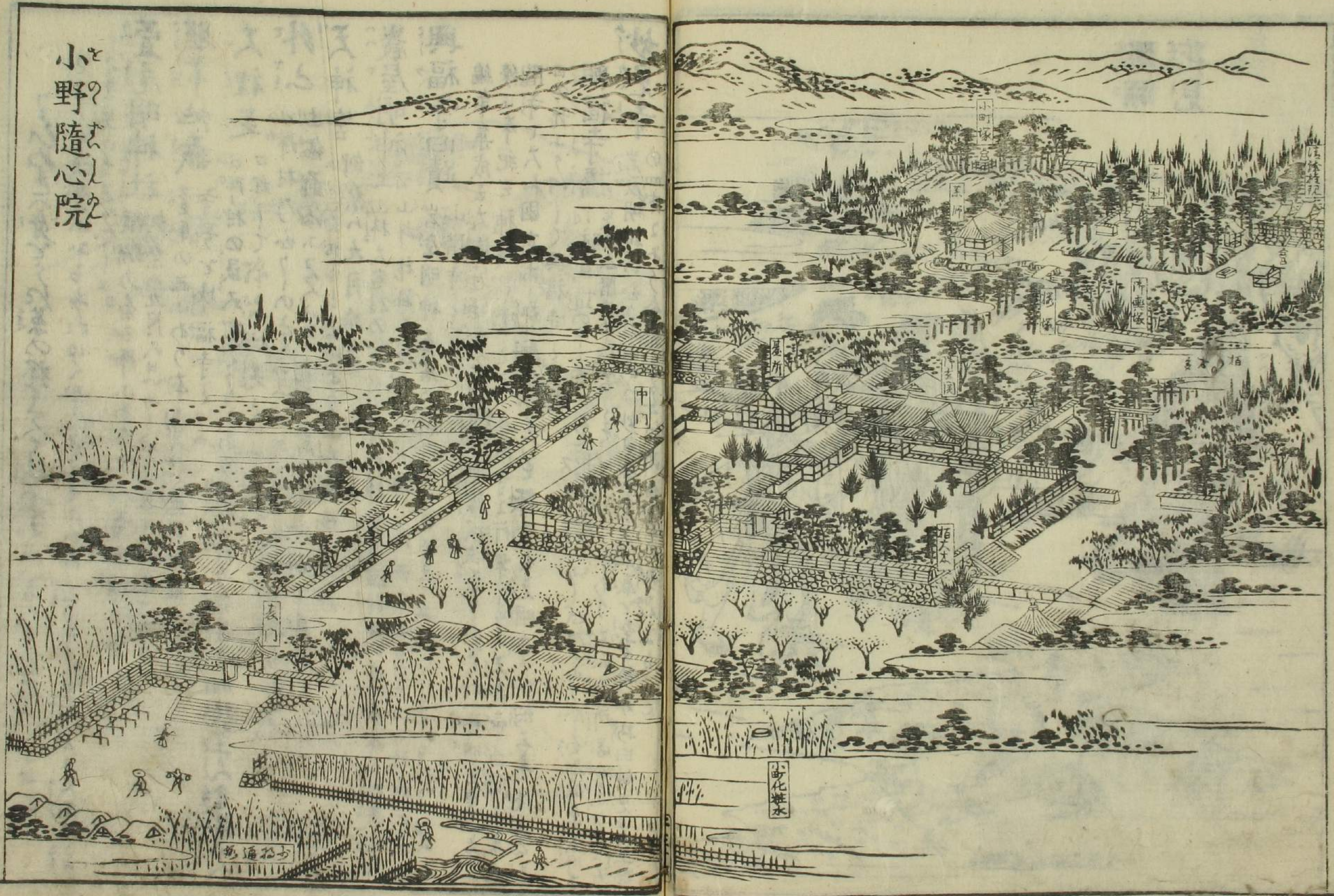
巖屋大明神



西山村

醍醐花見
続門葉
花盛なりけれバ読侍る
義淳法師

小野随心院（をのずいしんゐん）



わひぬれハ身をうき草の根をたえて誘ふ水あらハいなんとそ思ふ　小野小町

とよミて次第におちふれゆくかとみえそ小野山にそさすらへける人間乃有
さま是にそ志らんし云

萱尾明神社 醍醐の南日野にあり土人湊明神と云
例祭ハ九月九日にして法界寺の鎮守なり

腰掛地蔵 萱尾の西にあり本尊ハ行基の作長八尺
寺号を浄福寺といふ

大裡芝 日野村の艮町そくにあり日野家の別荘乃旧地と土人宮家といふ
口称して今大裡芝といふ

外山 日野村乃むかしの山をいふ此所に鴨長明方丈石あり
由縁前編にみえたり近年山岩垣氏碑石を建つ

天神宮 小栗栖西の山上にあり土人産神と云
例祭ハ九月晦日之

巌屋明神社 山科大宅村のむかしにある神宮道祖神西の山と同神と神祇式云
山科神社二座土人生土神と云例祭九月十六日神輿二基
岩屋明神鳥居の巽二町にあり是ハ初にいふことあらし也

興福寺旧蹟 山階寺といふ
大織冠鎌足公山階陶原館を改て寺とせられハ斉明天皇三年也
編年集成云天武帝白鳳元年
続日本紀云神護景雲元年山階寺に行幸し
階寺を大和国高市郡厩坂にうつす釈書云元明帝和銅三年淡海公奉
日の地にうつして興福寺と改む

興福寺橋 同所街道の中にある石橋也

佛足石 いにしへ此所にあり今南都西京薬師寺にあり
是古山階寺の門にありしを大和名所図会に見えたり

妙見寺 岩屋明神のむかしにあり妙見堂ありて小庵を建る拾芥抄曰妙見寺王城
の四方にあり今此所東方の妙見なるへし

音羽山 顕注密勘云相坂関ハ山城と近江の境也音羽山ハ其れ西南の山続にて関より西ハ山階なり。瀧あり。里ありと瀧ぞ
おとは山をまうでゝ音羽山のお紫を見てよめる

古今 秋風の吹にし日より音羽山峯の梢も色つきにけり 貫之

夫木 あふ神の音羽乃瀧やはさらん関の名くもれて 中務親王

新後撰 湧津瀬に落そふ水れ音羽河せくとてもうき五月雨乃ころ 為氏

同 秋ふかくなりゆくまゝに衣うつ音羽の里や夜寒なるらん 頼泰

名寄 郭公いたくなきそ音羽山ぬけし里にやどりさらせん 藤原成房

牛尾山 音羽山といふ法巌寺といふ観音堂なり 由縁於縁に見へたり

堀川百首 嶺たかき牛の尾にいる人を紫車みそなはすかな 修理大夫 顕季

二条集 牛の尾やまれくるまふる滝てはてしなき峯乃白雪

布引瀧 牛尾山にあり高さ三丈余幅二間計 岩上に布を引がごとし

鉋ヶ淵 布引瀧より二十間計坂路の左にあり巌間に方四間余の淵あり 又野子東村四手井氏の家に霊方乃丸薬あり操金屑丸といふむかし此淵に大蛇棲ぐん民を悩ます事ありし四手井氏の先祖に伴賀某と云ふ男士あり常に鉋を用ゐけり 延文三年三月七日来りて此淵を通りけるに大蛇出て人を害せんとす 鋸をもつて大蛇をきりころし安く退治して後其功により 東清水寺の音羽瀧一日一夜血流れたりといふかの大蛇の尾を

牛尾山法厳寺

此辺の芝生にぞ焼捨たる今に其所を焼芝とよぶ　景綱は我家にかへりて後毒蛇の瘴気にあたりて命も危ふくなりける所に香潔の衣を着たる異僧忽然として来り妙なる薬の霊方を与へ即調合しこれを服薬すれば速に平愈し侍りぬ　然るに此人は牛尾観世音の応験なりとて略縁起かや語しける　それより四の井氏の家に代々秘薬として伝へしを後子孫年中松永弾正殿久秀此霊薬の功能をためしみんとて極罪の者十人を出して大蔵にあて八人には此薬を服しめ二人にはあたへずしかるに八人の者は忽蘇生し二人は即死せり　是より薬名の上に孫の文字を添らしめ山科様金創秘伝と題その薬觴今も厨子奥村四ツ井氏の支族に数代ひさく其後繁しく世に弘む

若宮八幡 志ぼ村にあり此所の生土神なり祭礼は九月日は年によりて替り　祠乃傍に古墳あり土人王塚といふ

白石明神社 小山村にあり東の山の下に一の白石あり其側に社あり　又號白石明神

白石菴 旧所にあり源東祇樹一源統禅師行状云禅師諱は会統字は一源肥後の人也菊池藤氏に起る戊寅の春小山の下に居し其後白石の神祠に隣る故に白石菴といふ

蓮如上人墳 山科本願寺旧地の西にあり二水記云享禄五年八月廿四日山科本願寺ハ四五代に及んで寺中広大無双也荘厳只仏国の如し今日一時に滅亡に帰之　二水記

九月十三夜月おもしろかりければ東山を見て

大宅や山科はるく小野山のむかふに成ぬる庵乃月かげ　蓮如上人

實如上人墳 旧所東野村の西にあり實如上人ハ本願寺九代にして蓮如上人の八男也兼法印権大僧都大永五年二月二日遷化を

山科妙見堂

奉贈日本山科實如老上人
上人徳行是問何一箇禅門大丈夫心裏要容天外善此生渾似竹中居
杭州鉄冠道人詹仲和
大明正徳八年五月
此大明詹仲和といふもの竹の画と書實如上人を賞せる乃讃なり今西本願寺預る乃
寶藏にあり大明正徳八年ハ日本永正十年に當れり

青龍山白河寺 東野村にあり禅宗妙心寺に屬す本尊阿弥陀佛ハ惠覺の
作也像二尺餘後白河院の宸脚 同帝の石塔あり當寺の初
ハ浄土宗那口山別時寺と号す中興梅天和尚

三ノ宮明神社 同所にあり祭神三座 菅不合尊 右稲荷 右八幡 此所乃
生土神なり

阿弥陀寺 宮本乃堂乃本尊阿弥陀佛脇士毘沙門不動開祖ハ大僧
都頼音坊寛永年中の建立也後水尾帝の勅願所也

花山稲荷社 南花山にあり世の人大石稲荷と
称す近年再建あり

梅本寺 花山遊分の南にあり禅宗曹洞中興ハ加州金澤大乘寺
四十一世祖隣和尚なり
本尊十一面觀音 長二尺脇士ハ愛染不動也本尊を發揮の觀音と号す本
尊ハ花山帝の愛妃弘徽殿の女御空しくならせ給ひし御
悲歎深かるあまりの故に治世二年にして寛和二年六月廿二日聖壽十九才
にして帝位をおりさせたまひ此花山寺に至て御髪を除しめ法諱を入覚
と改めさせ給ひ法皇と称し奉る其後熊野権現乃霊夢を蒙て畿内
乃近國にて霊佛乃觀世音卅三所を選ませたまひ巡行し給ふ是
西國巡礼の始也其時自身の佛を負せたまひ年ハ王體疲れさせ給はんと
て當寺の始祖佛眼上人に發揮の御衣に觀音の像を画せ御肩に
かけさせられしかりまね其發揮乃觀音を模して當寺乃本尊となん
故に發揮の觀音ともそうなづけたる

むかし仁和寺の法師が石清水
を拝まんとて極楽寺
高良ばかりを拝みて
にがさそかへりつゝふかく
暗道山路かどハ
村里ふかくゆく
ゆゑをしるべしとて
めでて同じ人多き
事を多くおしの
ちかふくも
先達ハあらまほし
きことゝ兼好
法師も
教訓し
すいね

新京今
白雲の
かゝる桜も
あさなふ
ぬかれ
山縁に
日ハくれにけり
権僧正永縁

阿弥陀堂 小花山にあり本尊阿弥陀佛ハ坐像四天計傳えいふし八東山阿弥陀ヶ峯

元慶寺 阿弥陀堂の本尊るといふ一説ふハ重盛公燈籠堂本尊るともいふ

同所阿弥陀堂東ふ一町計ふあり初めハ天台宗近年禅宗ふと改む

妙巖和尚天明三年ふは本堂再建あり

本尊藥師佛 坐像七寸僧正遍昭の作とそ **脇士** 阿弥陀佛慈覚の作 毘沙門天運慶の作 **僧正遍昭像** 自作坐像一尺八寸

花山法皇像 御自作共ふ脇檀ふ安ず 當寺ハ陽成帝乃御願ふして貞観十一年ふ伽藍

始草創し紀元を配して元慶寺といふ いふしへの地ハ街ゐの北ふ山像ふ寺の間と呼出字の地あり土人曰今ふ至て礎石土中より出るといへり

花山僧正 僧正遍昭始ハ俗姓ハ侍郎良安世が男ふして宗貞と号し仁明帝乃近臣ふして寵遇日々ふ昌なり嘉祥三年三月帝崩し給ふ其哀慕ふたへずして比叡山ふ登て髪をおろし慈覚の室ふ入て台教入つるゝ又勅ありて總持院ふおゐて三部の灌頂を座主圓珍ゟうけ元慶三年ふ僧正となる仁和帝遍昭が為徳を感じ封戸百戸を賜ふ元慶寺乃座主とる寛平二年正月十九日入寂を已上元亨釋書

花山ハ法皇のえゆきありしところを読まんとせし時

拾遺 まてといへとまらし花山にきつとなくらんのねもかふ 僧正遍昭

花山法皇 人皇六十五代の帝諱ハ師貞冷泉第一の皇子寛和二年當寺ふ入て落飾し給ふ入覚法皇又花山院とも号し同年七月播州書寫山ふ行幸ありまた寛弘五年二月八日崩じ玉ふ寿齢四十一歳

著聞集云さても御代世をそむかせ玉ふあふりて故ふ恐しく法住寺相國の女弘徽殿の女御もさうりうせのさうかのふりあく御出でるさしゝふてしかゞ御歌を世の中おそく覚えてみられけるふ粟田関白いまだ蔵人の辨とて有けるか扇子ふ妻子珍宝及王位臨命終時不随者といふ文を書てまいらせたりけるを御覧ぜられけるよりこそいよいよ御心おこりふかれ 下畧

宮城郡小米ヶ袋
広丁四拾番地
屋嶋氏